

四日提出)ニ依ルモ明瞭ナレハ假リニ原告カ訴狀記載ノ如キ栗原縣設置ノ際上地處分ヲ受ケタリト
ノ申立ヲ事實ナリトスルモ是レ所謂廢藩置縣ノ當時ニ於ケル上地處分ニシテ其以前ニ於ケル處分ト
云フヲ得サレハ下辰法第一條末項ノ規定ノ適用ヲ受クヘキ範圍ニ屬セシムルヲ相當ト認ムルニ依リ
之レニ反スル被告ノ辯抗ハ採用セズ原告ハ本件係争地ハ元ト除屋敷ニシテ甲第一號證(嘉永四年作
成ノ讓渡證文)記載ノ如ク其先代カ同藩士小梨某ヨリ買受ケタル私有地ナリト主張スルモ舊仙臺藩
制ヲ按スルニ除屋敷ハ私有地ナリトノ確證ナキノミナラス原告提出ノ參考證(仙臺藩租稅要略)中
「諸給人在郷除屋敷等御定」トアル項ノ下ニ「按」除ハ高ヲ除クノ意味ニテ無稅地トスルナリ是ハ
倒目等ト均シク高外ナリシ」云云トアル記載ニ依ルモ除屋敷ハ所謂除地ニシテ貢租ヲ免除セラレタ
ルモノナルヲ以テ或ハ藩士ノ私有地ナルカ如ク認メラルモ同書中宅地ノ項ニハ「按」舊制宅地ハ諸
士屋敷地ト市街宅地トヲ問ハス悉ク無稅ナリ諸士屋敷地ニハ其家祿ノ多寡及班格ノ高下ニ隨テ廣狹
皆一定ノ例規アリ」云云ト記載アリ而シテ舊仙臺藩ニ於テ削耕ノ處分ヲ受ケタル際伊達家重臣笠原
十吉外二名ヨリ辨事役所ヘ差出シタル歎願書ニハ「(前略)一山林所持仕又は除地ト唱郡村高外ノ屋
敷地を所持仕居候分御座候處右は前々より高外に而無租稅入分に御座候間是迄之儘に被相任被下追
追多分ニ開墾相成候義も御座候は、其節租稅被取上候様被成下度奉存候」云云トアリテ該願書ニ對
スル辨事役所ノ指令ニ依レハ「(前略)伊達龜三郎舊領上地之内舊藩士陪隸從前土着自分、私致居候
者歸農願出候得は聞届遣し相當の租稅爲相納戸口者追而可相届居住屋敷山野等都而高外の部は當分
の處爲活計持主え與置可申養蠶燒鹽鑛山其他職留之者散亂不爲致精々御撫恤行届候様取計可申事」

云云トアルヲ以テ舊藩時代ニ於テ所謂除地タリシ郡村高外ノ屋敷地ハ削耕ノ際舊領地ニ歸農セル者
ニ限リテ之レヲ付與シタル制度ト見ルヲ相當トス要スルニ舊藩主拜領ノ山林ニ對スル當裁判所ノ既
決判例ト全ク同一ノ趣旨ニ據リ本件係争ノ除屋敷ハ現ニ仙臺藩士族タル原告ノ所有コ屬セサルモノ
ト認定ス原告ハ甲第一號證乃至第三號證ノ如キ特別賣買ノ事實ニ依リテ本件屋敷地ノ所有權ヲ取得
シタルモノナレハ全ク公領關係タル封土ト其性質ヲ異ニシ之レト共ニ上地セラレヘキノ理由ナシト
主張スルモ甲第三號證ノ記事ニ依レハ舊仙臺藩士小梨順吉ヨリ原告先代良輔カ同藩士タルノ資格ニ
基キ藩主ノ聽許ヲ得テ其家中屋敷地トシテ讓受ケタルノ趣旨自ラ明瞭ニシテ普通家中屋敷地ノ如キ
ハ他藩ノ例ニ依レハ藩籍奉還ノ際ニ其藩士ノ所有ニ歸セシメタル事實之レナキノ非サルモ舊仙臺藩
ニ在リテハ明治維新ノ際一旦朝敵トナリシカ爲メニ其領土ヲ削減セラレタルモノニシテ則チ他封ト
異リ其削減ニ係ル藩主ノ所領地ハ勿論一般ニ舊藩士ノ資格ヲ以テ藩主ヨリ認許セラレアリタル山林
屋敷地同時ニ其全部ヲ沒收セラレタルモノト認定セサルヲ得テ隨テ舊藩主カ更ニ二十八萬石ニ減封
セラレタル以後藩主ト共ニ其新領土ニ附隨セル者ニ就テハ依然其土籍ヲ存續シ而シテ舊領地ニ其儘
土着シテ農商ニ歸シタル者ニ限リ士籍ヲ取上ケ舊來耕耘ノ土地若クハ山林ト共ニ其居住屋敷地ヲモ
特ニ惠與セラレタルノ主旨ト見ルヘキノ依リ原告カ現在舊藩士族ノ資格ヲ維持スルニ拘ハラヌ猶舊
時ノ屋敷地ヲ私有ニ保留シ得ヘキモノナリト主張スルハ其當ヲ得サルモノトス此他原告被告雙方ニ於
テ種種陳辯スル所アルモ裁判上必要ナキヲ以テ一一説明ヲ與ヘス依テ原告ノ請求ハ何等理由ナキモ
ノト認メ主文ノ如ク判決ス

●營業稅課稅標準額決定取消ノ訴 明治四十三年第三百九十五號
明治四十四年三月二十四日判決 (請求相立)

判決要旨

一、營業稅ハ必ス營業者本人ニ課スルコトヲ要ス

一、甲者カ從來營業主トシテ營業稅及ヒ營業ニ依リテ得タル收益ニ對シ所得稅ヲ納附シ來リ且ツ現在ノ營業場ニハ營業主甲某ノ表札ヲ掲クルニ於テハ假令同業組合ノ名簿ニハ甲者ノ子乙者ノ氏名ヲ出シ且ツ稅務員カ調査ノ爲メ出張シタル際ニハ子タル乙者カ稅務員ニ向ヒ父ハ老人ニシテ營業上一切ノ事ハ自分ノ掌ル所ニシテ營業者ハ自分ナリト明言シタルコトアリトスルモ營業者本人ハ尙ホ之ヲ甲者ナリト推斷スルヲ正當トス

說明

營業稅ノ賦課 營業稅ハ營業者本人ニ之ヲ賦課スルコトヲ要ス苟モ其ノ本人ナラサルトキハ假令本人ト父子夫婦ノ關係アリトスルモ其ノ課稅ハ不法タルヲ免

營業稅ノ賦課

云レ其ヲ來ル働員左ナサニ業件在實カ
フニ強以リ可作ニレルル尙者同テヲレ
ヘ據弱テタラヲ對ハモ可ホ本業ハ綜ス
キリノ現ルサ云シ同ノラ營人組從合然
ナ以差營事レフ本業ハサ業ノ合來シリ
リテ自業實ハニ件組其ル者何名簿營
本ラ者及ナ止判合ノハ本人上業ス營
件明トヒリマ旨員業蓋人タノ者ル業
營業カ認現之ニ納掲以從判定ムヲ以
本ルルノ反稅義ル直ス法ル知及テラ
人ヲ最業場從者如ニ營團體ナシテ必
判ル有カニ公然業稅ノヲ人ナテ速
定ヘ力ノ資料ニ業主ヒ位明言シタ
スキノ資料ニ業主ヒ位明言シタ
ルナ資料ニ業主ヒ位明言シタ
カリニ業主ヒ位明言シタ
如夫レ然テ之ヲ前段ノ稅務官吏甚
事理ヲ顛倒スルノ吏甚シキモテ
頭倒スルノ吏甚シキモテ
ノ吏甚シキモテ
甚シキモテ
シキモテ
キモテ
モテ
ト

被告カ明治四十三年十一月十四日附ヲ以テ原告ニ通知シタル明治四十三年分營業稅課稅標準ノ決
定ハ之ヲ取消ス

理由

本訴ノ爭點ハ第一原告ハ寫眞營業者ナリヤ否ヤ第二從業者ハ二人以上ナリヤ否ヤ二點ニ在リト
ス依リテ先第一點ニ付按スルニ原告ノ父岡野義之ハ明治四十二年ニ至ル迄既往數年間寫眞營業者
トシテ營業稅又ハ府稅營業稅工業稅ヲ納メタリシコト及寫眞營業者ヨリ生スル收益ヲ自己ノ所得ト
シテ所得稅ヲ納メタリシコトハ被告モ爭ハサル所ナルノミナラス本件寫眞營業所ノ表札ニ「館主
岡野義之」ト掲ケアルコトモ亦被告ノ爭ハサル所ナルヲ以テ本件寫眞營業者ハ岡野義之ニシテ原
告ニアラスト推定スルヲ相當トス被告ハ東京寫眞師同業組合員名簿ニ原告ノ姓名ノ掲ケアルヲ以
テ寫眞營業者ハ即チ原告ナリト主張スレトモ右同業組合員ハ必スシモ營業者自身ニ限ルモノト認
ムルコト能ハサルカ故ニ此點ニ於ケル被告ノ主張ハ理由ナシ被告ハ又神田橋稅務署員カ課稅標準
調査ノ爲メ本件寫眞營業所ニ出張シタル際原告ハ自ラ父義之ハ老人ニシテ營業上一切ノ事ハ自分
ノ掌ル所ニシテ營業者ハ即チ自分ナリト明言シタルカ故ニ原告ノ營業者タルコト疑ヲ容レズト主

營業稅ノ賦課

原 告 東京市麹町區麹町紀尾井町 岡野義一 訴訟代理人 南部 哲治
被 告 東京稅務監督局長 菅野盛次郎 訴訟代理人 松村綱之助

張スレトモ此事實ハ原告ノ認メサル所ナルハミナラス假リニ原告ニ於テ叙上ノ如ク明言シタルコトアリトスルモ單ニ事實上ノ營業管理者タル意義ニ於テ爾カク申述シタルモノナルヤモ知ルヘカラサルカ故ニ此點ニ於ケル被告ノ主張モ亦理由ナク結局被告ノ主張ハ一モ前記ノ推定ヲ覆ヘスニ足ルモノナキヲ以テ本件寫眞營業者ハ岡野義之ニシテ原告ニアラスト認定セサルヲ得ス然ラハ則被告カ原告ニ對シ爲シタル營業稅課稅標準ノ決定通知ハ違法ナルコト論ヲ俟タサル所ナリ又本訴第二ノ爭點ハ原告ヲ以テ營業者ナリト認定スル場合ニ於テ始テ之ヲ決スヘキモノニシテ既ニ原告カ營業者ニアラサル以上此爭點ハ本件裁判ニ關係ナキモノトス

判決要旨

一、明治三年藩制ノ發布後各藩ニ於ケル士卒ノ給祿ヲ改定スルニハ之ヲ一種類ト爲スモ將タ各種ノ等差ヲ付スルモノニ其自由ニ屬シタルモノニシテ舊藩規程ノ爲メニ拘束セラルルコトナシ

原 告 島根縣能義郡廣瀨町 士族 神山 銑次郎 外四十二名
訴訟代理人 島名 小兵衛 山根 豐藏

原告ノ請求相立タス

理由

按スルニ明治三年藩制ノ發布ニ際シ各藩ニ於テ士卒ノ給祿ヲ改定スルニ當リ遵守ス可キ法規ハ藩制アルノミニシテ同第四項但書ニ「但公廩入費士卒祿ニ充ツヘシ尤精節減シ有餘ヲ以テ軍用ニ可當置様心掛ク可ク事」トアリ同第十二項ニハ「從前藩債ハ一般ノ石高ニ關スル事ニ付其支消之方ハ藩債ノ總額ニヨリ支消年限ハ用途ヲ立知事家祿士卒祿其他公廩入費等ヨリ分賦シテ可償却事」トアルノミニシテ他ニ何等ノ規定ナケレハ士卒ノ給祿ヲ一種類ト爲スモ又ハ各種ノ等差ヲ付スルモ其ノ自由ニ屬スルヲ以テ本訴廣瀨藩ニ於テ士族ヲ悉ク卒族ヲ悉ク八石ト定メタルモ藩制ニ違背シタルモノト云フヲ得ス而シテ原告ハ本訴藩制ノ前文ニ「天下一般士族卒二等ノ外級ナキノ御規則ニ付昨冬改定ノ藩制其總テ相廢シ更ニ左ノ通り相定ム」トアルヲ援用シ藩制第七項ニ「士卒ノ外別ニ級アル可ラサル事」トアル規定ヲ誤解シ給祿ニ等差ヲ付スヘカラサルモノトシ制定セラレタル無効ノ藩制ナリト主張スルモ右前文ハ該藩制ヲ制定スル所以ノ理由ヲ説明シタルニ過キスシテ理由ハ法規其物ニ非サレハ假令本理由ニ誤謬アリトスルモ藩制其物ニシテ前顯説明ノ如ク適法ナル以上ハ之ヲ無効ノ制度ナリト謂フヲ得ス原告ハ又本訴藩制ハ朝裁ヲ經スシテ制定セラ

改定セル士卒給祿ノ種類ニ關シテ理由ニ誤謬アル藩制ノ效力ニ基キ改定セラレタル藩制ノ效力 二三

レタルモノニシテ藩制第六項ニ「功アリテ祿ヲ増シ罪アリテ祿ヲ褫キ及一切ノ死刑ハ朝裁ヲ請ヘシ」トアルニ牴觸シタル違法ノ祿制ナリト主張スレトモ藩制第六項ハ功アルヲ理由トシ祿ヲ増シ罪アルヲ理由トシ祿ヲ褫ク場合ニハ朝裁ヲ經ヘキコトヲ規定シタルモノニシテ本訴祿制ハ藩制第四項及第十二項等ニ基ツキ藩政整理ノ爲メ改正セラレタルニ外ナリナルコトハ前文ニ「今般朝旨ヲ奉戴シ藩制改革祿制相改メ候條一同可心得候事」トアルニ依リ明瞭ニシテ賞罰ノ結果トシテ増祿又ハ減祿シタルニ非サレハ假令朝裁ヲ經サルモ藩制ニ違背シタル無効ノ制度ナリト謂フヲ得ス以上説明ノ如ク明治三年十一月改定祿制ハ適法ニシテ原告等ハ本祿制ニ依リ相當ノ處分ヲ受ケタル者ナレハ其請求ハ理由ナキモノトス是レ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

●營業稅課稅標準違法決定取消請求ノ訴 明治四十一年第七十七號 (請求相立) 明治四十四年二月二十日判決

判決要旨

一、米穀取引所ニ於ケル定期賣買ハ單ニ轉賣又ハ買戻ニヨリ損益ヲ決濟スルヲ通例トスルモノニシテ始メヨリ現物ヲ授受スルノ目的ヲ以テナスモノニアラス
從テ定期米ノ買附ヲナシタル者カ現米ヲ引受ケタル場合ニ於テ之ヲ販賣スルカ爲メニ他ノ商店ニ委託販賣ヲナサシメ

タルカ如キハ右買附人ハ取引ノ關係ヨリ己ムヲ得ス茲ニ至リタルモノト解スルヲ相當トシ始メヨリ米穀ノ販賣ヲ營業ノ意思ヲ以テ現米ヲ引受ケタルモノト解スルハ不當ノ解釋タルヲ免カレス從テ稅務官吏カ此ノ者ニ對シ物品販賣業ノ營業稅ヲ科シタルハ違法ナリ

東京市日本橋區蠟燭町一丁目二番地

原

告 松澤與七

訴訟代理人 秋山常吉

被

告 東京稅務監督局長 菅野盛次郎

訴訟代理人 岩田周作

主文

被告カ明治四十一年十月五日附ノ通知書ヲ以テ原告ノ明治四十一年分營業稅課稅標準額ヲ賣上金額二百萬圓建物賃借價格五百五十圓從業者四人トシタル決定ハ之ヲ取消ス

理由

按スルニ當事者間ニ爭ヒナキ甲第一號證ハ一乃至三十二依レハ株式會社東京米穀取引所ニ於ケル賣買高ノ大部分ハ轉賣買戻ノ方法ニ依リテ決濟セラレ現物ノ受渡ハ非常ノ少量ナルコト明カナルト證人米穀取引所仲買谷崎久兵衛ハ「正米取引ニ付テハ買附ノ委託ヲ爲ス者ハ買附ケタル正米ヲ

取引所ニ於ケル現米取引及ヒ引受米ヲ委託販賣シタル者ニ對スル營業稅ノ賦課

直ニ引取ラスシテ將來相場ノ出ツルトキニ利益ヲ得ントハ考ヨリ轉賣シテ差額ヲ利セントスルノ意思アルヲ常トス(下略)トノ證言及證人米商仲買業阪上平次郎ノ「一體定期取引ニテハ轉賣買戻ラシテ差金ヲ利スルコトヲ目的トスルモノニシテ現物ヲ引取ルカ如キハ苦シ紛レニ爲スモノナレハナリ」トノ證言トニ依リテ見レハ株式會社東京米穀取引所ニ於ケル定期賣買ハ轉賣買戻ニ依リテ決濟シ現物ヲ授受スルノ意思ヲ以テ行ハルルモノニ非サルヲ常例ト認ム可ク原告ノ定期取引ニ於ケル買附ハ此常例ト異ナルヲ認ムヘキ徵憑ナキ限リハ亦常例ノ如ク現物引取ノ意思ヲ以テ爲シタルモノト認ムヘキニ非ス而シテ乙號證ニ依ルモ原告カ其ノ受米ヲ全部濫澤商店外二个所ニ委託販賣シタルコト明カニシテ其ノ以外ニ受米ヲ處理スル設備ナク定期米ノ買附ヲ爲シタルハ現物引取ノ意思ヲ以テ爲シタルモノナリト認ムヘキ何等ノ徵憑ノ認ムヘキモノ存セサルヲ以テ明治四十年ニ於テ原告カ毎月(九月限ヲ除ク)ノ受米ヲ爲シ委託販賣ヲ爲シタルハ畢竟自己ノ當初ノ意思ニ反シ受米ヲ爲ササルヲ得サルノ境遇ニ陥リタルノ結果之ヲ處分スルカ爲メニ已ムヲ得サルニ出テタルモノニシテ米穀販賣ヲ營業トシテ爲シタリト認メサルコト相當ニシテ被告カ原告ノ委託販賣ヲ以テ營業稅法ニ該當スル營業ヲ營ムモノナリト認メ物品販賣業トシテ營業稅稅課標準額ノ算定ヲ爲シタルハ相當ニアラス仍テ主文ノ如ク判決ス

●所得金額決定取消請求ノ訴 明治四十三年第四百二十二號 明治四十四年二月二十日判決 (請求不立)

判決要旨

一、株式會社カ當年度ノ利益ヲ豫想シテ其ノ一部ヲ使用人ニ慰勞トシテ配當スルハ則チ利益金ノ處分ニ外ナラス從テ此ノ配當セル總額ヲ會社ノ所得金中ニ算入シ所得金額ヲ算定スルモ違法ニアラス

一、使用人ニ慰勞金ヲ給與スルハ恰モ俸給ヲ給與スルカ如ク株主ニ配當スヘキ益金ノ有無ニ拘ラス毎年定期ニ給與シタル事實アリシトスルモ之ヲ利益金中ヨリ給與シタル事實明カナルトキハ其ノ配當金ヲ稱シテ利益金ニアラスト云フヲ得ス

一、會社ノ利益金ハ商法第五百十八條ニヨリ總會ニ於テ之ヲ決議スルヲ當然トスト雖モ此ノ規定ニ依ラサリシトテ利益金ノ性質ヲ失フモノニアラス

東京市麹町區有樂町一丁目一番地
原告 日本郵船株式會社
株式會社ノ利益金

同會社取締役社長
右代表者 近藤 廉平 訴訟代理人 岩田 宙造
東京稅務監督局長 外二名
被告 菅野盛次郎 訴訟代理人 岩田 周作

主 文

原告ノ請求相立タス。訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

理 由

本訴ノ争點ハ臨時手當金十八萬五千六百四十三圓九十九錢三厘ノ支出ハ原告會社ノ利益ノ一部ヲ配當シタルモノナルヤ否ニ在リ仍テ按スルニ乙第一號證ニ依レハ原告會社ハ第二十一期即チ明治三十九年度ヨリ二十三期即チ四十一年度ニ至ル使用人臨時手當金ハ孰レモ其事業年度ノ末日即チ前半年度分ハ三月三十一日後半年度分ハ九月三十日ニ支拂ヒ又其金額モ常ニ同一ナラサルコト明ナリ此等ノ點ヨリ之ヲ見ルトキハ係争臨時手當金ナルモノハ原告會社カ當該年度ノ利益ヲ豫想シ其一部ヲ使用人ノ勤勞ニ應シテ配當スルモノト認定スルヲ相當トス然ルニ原告ハ甲第三號證ノ一ヲ以テ第十二期即チ明治三十年後半年度分ハ全ク株主ニ配當スヘキ利益ナキニ拘ハラス使用人臨時手當金ヲ支拂ヒタルコトヲ立證シ臨時手當金ハ毎年度必ス支拂フヘキモノニシテ宛モ使用人ノ月給ト同ク通常經費ニ屬スルモノナリト主張スレトモ同年度ニ尙金五萬六千八百三十三圓八十九錢一厘ノ利益金アリ使用人臨時手當金ハ利益中ヨリ支拂ヒタルコト明カナレハ之ヲ以テ臨時手當金ハ利益配當ニアラスト云フヲ得ス尙原告ハ法人ノ利益配當ハ商法第百五十八條ニ依リ毎配當期日ニ

總會ヲ開キ之ヲ決議スヘキモノナルニ本件臨時手當金ハ此手續ニ依ラス配當決議前ニ經費トシテ支拂ヒ了リ精算上利益金トシテ存在セサル以上利益配當ト見ルヘキモノニアラサル旨主張スレトモ右ハ原告會社カ商法所定ノ手續ヲ履マサルニ止マリ之ニ依リテ該手當金ノ性質ヲ定ムルコト能ハサレハ此主張ハ採用シ難シ又原告ハ甲第三號證ノ二及三所載臨時手當ノ如キハ所謂利益ヲ配當シタルモノニシテ本件ノ臨時手當金ハ之ト其性質ヲ異ニスルモノナリト主張スレトモ之ニ依リ或事業年度ニ於テ使用人ノ慰勞金ヲ利益金中ヨリ支拂ヒタルコトヲ決算上ニ明示シタルヲ證スルニ止マリ本件ノ臨時手當金カ利益金ノ處分ニアラサル證トナシ難シ依テ主文ノ如ク判決ス

●縣稅戶數割附加稅町稅戶數割賦課不服ノ訴 明治四十三年第二百七十五號
明治四十四年二月二十一日第二部宣告

判 決 要 旨

- 一、分頭稅ハ課稅ノ標準ヲ居住ノ事實ニ採リ町稅戶數割ハ戶ヲ構フル事實ヲ基礎トスル縣稅戶數割ニ附加スルモノニシテ
- 二者課稅ノ目的ヲ異ニスルモノナレハ分頭稅ヲ完納シタル
- ヲ理由トシテ町稅戶數割ノ賦課ヲ拒ムヲ得ス

(參照) 分頭稅ハ本町内ニ下宿又ハ三ヶ月以上滞在シ縣稅戶數割ヲ負擔スル義務ナキ者ニ賦課ス但學生生徒及一定ノ職業ナキ者ハ課稅ノ限ニ在ラス(關町特別稅分) 頭稅條例第二條

一關町特別稅分頭稅條例第二條ノ旨趣○分頭稅及町稅戶數割ノ併課

原告 殿手縣西磐井郡一關町
中街十五番地居住官吏
新妻 誠一
被告 殿手縣西磐井郡一關町長
野村 純馬

原告ノ請求相立タス

理由

本訴ノ争點ハ分頭税ヲ課シタル者ニ對シ縣稅戶數割ノ附加税ヲ課シ得ルヤ否ヤニ在リ
按スルニ特別稅分頭稅條例第二條ニ「分頭稅ハ本町内ニ下宿父ハ三個月以上滞在シ縣稅戶數割ヲ
負擔スル義務ナキ者ニ賦課ス」トアルハ縣稅戶數割ヲ負擔セサル者ニ對シ分頭稅ヲ賦課スヘキコ
トヲ規定シタルニ止マリ縣稅ニ附加稅ヲ附加スヘキコトヲ制限シタル趣旨ニ非サルヤ條文上明白
ナレハ町カ町稅分頭稅ノ納稅者ニ對シ其負擔スル縣稅ニ附加稅ヲ附加スルハ同條例ノ精神ニ違背
スルモノト云フヲ得ス原告ハ分頭稅ト云ヒ戶數割ト云ヒ共ニ居住ナル同一事實ヲ基本トスルモノ
ナレハ原告カ後ニ至リ縣稅戶數割ヲ負擔スルモ既ニ分頭稅ヲ完納シタル以上ハ町稅戶數割ヲ賦課
セラルヘキモノニ非スト云フモ分頭稅ハ課稅ノ標準ヲ居住ノ事實ニ採リ町稅戶數割ハ戶ヲ構フル
事實ヲ基礎トスル縣稅戶數割ニ附加スルモノニシテ二者互ニ目的ヲ異ニスレハ分頭稅ヲ完納シタ
ルヲ理由トシテ町稅戶數割ノ賦課ヲ拒ムヲ得ス然レハ則チ被告カ町村制第九十條ニ依リ原告ニ對
シ其負擔スル縣稅戶數割ニ附加シテ本訴ノ町稅戶數割ヲ賦課シタルハ正當ニシテ原告ノ請求ハ理

由ナシ依テ主文ノ如ク判決ス

●國有林野下戻請求ノ訴ニ對スル妨訴抗辯 明治三十八年第八十六號 (抗辯不立)
明治四十四年二月二十四日第一號宣告

判決要旨

一、國有土地森林原野下戻ノ申請ニ付キ法定ノ期限經過後ニ提
出シタル追申書ハ獨立ナル申請トシテ適法ノモノニアラサ
レトモ之ヲ以テ曩キニナシタル申請ノ趣意ヲ解釋スル材料
ト爲スヲ妨ケス

原告 福島縣石川郡蓬田村
大字上蓬田
外六大字
同村長
右代表者 三本松豐吉 訴訟代理人 播磨辰治郎
岡崎正也
被告 農商務大臣男爵
大浦兼武 訴訟代理人 矢部 廉

主文

被告ノ抗辯相立タス

理由

法定ノ期限經過後ニ提出セル追申書ノ效力

按スルニ原告ノ農商務省ニ提出シタル申請書ニハ村有ニ下戻サルヘキコトヲ記載スルモ原告ノ同省ニ提出シタル追申書ノ記載前記大字七區ノ外ニハ大字ナキノ事實及原告ノ提出シタル申請書附屬ノ證據書類ノ内容ニ照シ其趣旨ヲ考察スルトキハ結局各大字ニ下戻サルヘキコトヲ求ムルモノニ外ナラス該追申書ハ國有土地森林原野下戻法所定ノ期限ニ後レテ差出シタルモノナルヲ以テ獨立ナル申請トシテハ被告ノ云フカ如ク固ヨリ適法ノモノニアラサルモ前ノ申請ノ趣意ヲ解釋スルハ材料トシテハ其適法ノ如何ヲ論スヘキモノニアラス則チ本件請求ハ前ニ不許可ノ處分ヲ受ケタルモノト謂フコトヲ妨ケサルヲ以テ被告ノ抗辯ハ其理由ナシトス仍テ主文ノ如ク判決ス

●溫泉源地浚渫工事不認可處分取消ノ訴 明治四十三年第二百一十一號
明治四十四年二月二十四日第一號宣告 (請求不立)

判決要旨

一、明治二十三年法律第六號ニハ行政訴訟ヲ提起シ得ル場合ヲ掲クルニ當リ單ニ「水利及土木ニ關スル件」トアルノミニシテ工事ノ目的如何ヲ不問サルカ故ニ或ル工事ノ目的カ溫泉使用ニ在ル場合ト雖モ苟モ其ノ性質カ水利又ハ土木ニ關スルモノタル以上ハ其ノ工事ノ不許可處分ニ對シ行政訴訟ヲ

提起スルモ違法ニアラス

一、縣令ノ規定ニ或ル工事ヲ爲スニ付テハ豫メ所縣知事ニ願出ツヘキ旨ノミヲ掲ケ之レニ對シ不認可ヲナシ得ルノ規定ヲ設ケサル場合ト雖モ知事ニ於テ若シ之ヲ認可セハ公益ヲ害スルモノト認メタルトキハ之ヲ認可セサルコトヲ得

(參照) 法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ掲ケル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得水利及土木ニ關スル事件(明治二十三年法律第六號第四號)

原 告 靜岡縣知事
告 青 沼 沃 訴訟代理人 古 屋 忍 三
被 告 石 原 健 三 訴訟代理人 大 島 要 藏
藤 葉 彦 三 郎

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

被告ハ本件係争ノ事實ハ溫泉使用ニ關スル問題ニシテ明治二十三年法律第六號所定ノ事項ニ該當セサルヲ以テ行政訴訟ヲ提起シ得ヘキ性質ノモノニアラスト云フモ本件係争ノ事實ハ溫泉源地浚渫工事ノ認否ニ關スルモノニシテ該工事ノ目的ハ溫泉使用ニ關スルモノナルモ其實質ハ水利土

水利土木ニ關スル行政訴訟ノ提起○知事ノ不認可權

木ニ關スル事件ニ外ナラスシテ法律第百六號ニハ單ニ「水利及土木ニ關スル事件」トアルノミニシテ工事ノ目的如何ニ依リ何等制限セラルル所ナキヲ以テ被告ノ妨訴抗辯ハ採用スルヲ得サルモノトス而シテ又行政廳ノ法規命令又ハ行政處分ヲ以テ所有權ヲ制限シ得ルヤ否等ニ關シ當事者間ニ於テ憲法第二十七條民法第二百六條並ニ行政執行法同法施行令等ヲ舉ケ種種論争スル所アルモ結局原告ハ明治三十八年靜岡縣令第三十四號其者ノ效力ヲ争フニハアラスシテ同令中第七條ニ關シ不認可ノ規定ナキヲ以テ被告カ正當ノ理由ヲ具備セズシテ原告ノ出願ヲ認可セサルハ不當ニ原告ノ所有權ヲ制限スル違法ノ處分ナリト云フニ在レハ本件ノ主タル争點ハ本件被告ノ處分カ正當ノ理由ヲ具備スルヤ否ニ歸着スルモノトス被告ハ乙第一號證溫泉場副取締ヨリノ届書中ニ係争溫泉カ記載セラレサル事實ニ依リ係争溫泉眼ノ湯カ溫泉源地タルヲ認メスト云フモ甲第六號證土地臺帳ニ「田方郡熱海町大字熱海字本町地番四四九ノ二地目鑛泉地段別又ハ坪數〇〇一」ノ記事アリ又甲第四號證溫泉場取締ノ證明書ニ於テモ原告カ字本町四百四十九番ノ二鑛泉源地目ノ湯及大湯ノ兩湯ヲ以テ浴用ニ供シ營業セシ旨記載シアレハ此點ニ關スル被告ノ主張ハ正當ナリト認メ難キモ被告カ本件不認可處分ヲ爲セシハ係争眼ノ湯ヲ鑛泉源地ト認メサリシカ爲ニハアラスシテ下ニ説明スルカ如キ理由ニ依ルモノナレハ此ノ點ニ依リ被告處分ヲ不當ナリト云フヲ得ス之ニ反シ原告ハ明治三十八年迄ハ蒸風呂モ設置シアリテ盛ニ係争溫泉ヲ使用シ居タルモ近年源地崩潰ノ爲メ涸渴セシモノナリト主張スルモ甲第五號證個人ノ證明書ノ外別ニ證據ナク而シテ源地崩潰ノ爲メ涸渴セシモノナリトノ點ニ關シ實地ノ狀況ニ於テ崩潰ノ形蹟ナシトノ被告ノ抗辯ニ對シ其

外部ニ於テ著シキ崩潰ノ跡ナシトスルモ内部ニ故障アルハ明白ナリト云ヒ其主張ヲ變更セシモノナレハ甲第五號證ハ信ヲ措クニ足ラサルモノトス又原告ハ浴槽等ノ存在ニ依リ係争溫泉ヲ常用セシモノナリト云フモ右浴室等ハ青木湯ヲ引用シ前所有者カ使用セシモノナリト被告ノ抗辯ニ對シ何等之ニ對シ立證スル所ナク又前記甲第四號證ニ依ルモ目ノ湯及大湯兩湯ヲ以テ浴用ニ供シ營業セシ旨記載シアリテ係争溫泉ノミヲ單獨ニ使用シ營業スルヲ得シモノニアラサルコト明瞭ナルノミナラス前記縣令ノ規定ニ基ク溫泉場副取締ヨリノ届書乙第一號證中ニモ係争眼ノ湯ノ記載セラレサル事實アル等ヲ綜合スレハ係争溫泉ハ從來其湧出量甚々微弱ナリシモノト推定スルニ難カラサルモノトス又原告ハ溫泉湧出回復ノ爲メ浚渫ノ認可ヲ出願セシモノニシテ新ニ掘鑿スルモノトハ自ラ性質ヲ異ニスト主張スルモ甲第一號證中「工事方法」ニハ「一目的鑛泉源地浚渫一浚渫ノ深サ凡二十五間湧出迄一浚渫ノ方法舊來ノ土鑛ヲ入レ替へ竹管ヲ鐵管ニ替ヘル」トアルノミニシテ從來ノ工事設計明瞭ナラス而シテ原告ハ之ニ關シ何等立證スル所ナキヲ以テ復舊工事ナルヲ認メ難キノミナラス現在ノ深サ二三尺ニシテ湯槽ヘ引キタル樋管以下四寸位ニ滿サルモノヲ凡二十五間湧出ニ至ル迄浚渫シ且竹管ヲ鐵管ニ代ユルカ如キハ其效果新ニ掘鑿スルト差違ナキモノナルヲ認メサルヲ得ス以上説明スルカ如ク係争眼ノ湯カ溫泉源地タル事實ハ之ヲ認メ得ヘキモ從來盛ニ湧出シ溫泉トシテ單獨ニ常用セシモノナルヲ認メ難キノミナラス出願工事ノ如キモ復舊工事ト認メ難クシテ新ニ掘鑿スルモノト同一ノ效果ヲ生スヘキモノト認ムヘク然カモ御料溫泉大湯ト係争溫泉トノ距離ハ約三十間ニシテ係争溫泉ノ大湯ヨリ低地ニ在ルハ原告ノ争ハサル所ニシテ

水利土木ニ關スル行政訴訟ノ提起〇知事ノ不認可權

係争温泉ノ如キ大湯附近ノ地ニ於テ温泉ヲ亂掘スルトキハ大湯ノ噴出回数及ヒ噴出量ニ影響シ引
用者間ニ紛擾ヲ來シ且熱海町全體ノ公益ヲ害スルモノナルハ乙第二號證乃至第七號證ニ依リ之ヲ
認定スルニ十分ナル所トス然レハ本件殆ト廢滅ニ歸シ居ル係争温泉ヲ新ニ掘鑿スルト同様ナル方
法ヲ以テ浚渫セントスルハ出願ニ對シ被告ニ於テ之ヲ認可スルトキハ原告ニ新ニ温泉掘鑿ノ權利
ヲ付與スルト等シクシテ温泉使用上不當ニシテ公益上害アルノミナラス之ヲ認可スルトキハ熱海
町住民間ニ紛擾ヲ生スルハ虞アリ公安維持上必要ナリト認メ縣令第七條ノ規定ニ依リ認可セザリ
シモノナレハ本件被告處分ヲ以テ理由ナク從テ違法ナルモノト云フヲ得サルモノトス右ノ外原被
告ニ於テ種種論争スル所アルモ必要ナラヌト認メ一一説明セス右ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決
ス

●不當處分取消請求ノ訴

明治四十一年第九十六號
明治四十四年二月二十五日第二部宣告

(請求相立)

判決要旨

一、改租圖ノ外境界査定ノ標準ナキ場合ニ於テ該圖面ニ適合セ
サル査定處分ハ不當ナリ

原告 伊藤伊與吉 訴訟代理人 小川平吉
東京大林區署長
被告 柳澤義一 訴訟代理人 有馬忠三郎

主文

被告カ明治四十一年二月十二日附ヲ以テ下野國鹽谷郡鹽原村大字下鹽原字門前原告所有山林ト隣
接地白倉山國有林トノ境界ニ關シ爲シタル査定處分ハ之ヲ取消ス
被告ハ更ニ相當ノ査定ヲ爲スヘシ

理由

按スルニ本件ニ於テ官民有地境界査定ノ標準タルヘキモノハ改租圖ノ外ニ之ヲ求ムルヲ得ス而シ
テ被告ハ改租圖(乙第一號證)ニ基キ本件ノ査定處分ヲ爲シタリト云フモ改租圖ニテハ原告所有
ハ土地ハ東西ノ距離カ南北ノ距離ニ比シ長キニ拘ハラヌ臨檢ノ結果ニ依レハ之ニ反スルニ依リ查
定處分ハ改租圖ニ適合スルモノト云フヲ得ス依テ主文ノ如ク判決ス

●鑛區稅賦課取消請求ノ訴

明治四十三年第二百三號
明治四十四年二月二十七日第三部宣告

(請求不立)

判決要旨

一、鑛業權ノ發生消滅ハ鑛業法第二十條ニ定ムル例外ノ場合ヲ
除クノ外總テ鑛業原簿ニ登録ヲ待テ始メテ其效力ヲ生スル
モノトス

一、鑛業權ノ消滅ハ登録取消ノ届出ヲナシタル日ニ消滅スルニ

改租圖ニ適合セサル境界處分ノ效力○鑛業權ノ發生及ヒ消滅ノ時期

アラスシテ其ノ取消ヲ登録原簿ニ登録シタル日ニ消滅ス
一、廢業登録ノ日如何ヲ問ハス其廢業登録年度一年分ノ鑛區稅
ヲ賦課シタルハ正當ナリ

原 告 岐阜縣郡上郡八幡町
水谷幸次郎
被告 上有知稅務署長稅務署屬
大塚 素

原告ノ請求相立タス

理 由

本訴ノ爭點ハ凡ソ鑛業權ハ其登録取消ノ届出書ヲ所轄官署ニ提出シタル日ニ消滅スルヤ將タ其取
消カ鑛業原簿ニ登録セラレタル日ニ消滅スルヤニ在リ按スルニ鑛業法第二十條ニ「前條第一項ニ
掲ケタル事項ハ(中略)登録ヲ爲スニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス」トアリ而シテ同第十九條ニハ
「鑛業權及抵當權ノ設定、變更、移轉、消滅並處分ノ制限ハ鑛業原簿ニ登録ス」トアリ同第十八條
第一項ニ「試掘權ノ存續期間ハ登録ノ日ヨリ二個年トス」トアリ此等ノ規定ヲ綜合考覈スルトキ
ハ鑛業法ハ登録ニ重キヲ措キ鑛業權ノ發生消滅等ハ鑛業法第二十條所定例外ノ場合ヲ除キ總テ登
録ヲ待テ始メテ效力ヲ生ストナス趣旨ト解セサル可ラス隨テ前示第二十條ノ登録ヲ爲スニアラサ

レハ其效力ヲ生セストアルハ第三者ニ對シ對抗力ナキコトヲ規定シタルモノニシテ實質上鑛業權
ノ發生消滅ニ關スルモノニアラストハ原告主張ハ理由ナシ然ラハ原告ハ鑛業原簿ニ鑛業權消滅ノ
登録アリタル日即チ明治四十三年一月六日迄ハ鑛業權者ナルヲ以テ被告カ同年分ノ鑛業稅ヲ賦課
シタルハ正當ニシテ本訴原告ノ請求ハ理由ナシトス依テ主文ノ如ク判決ス

●村稅ノ一部削除ノ訴願ニ對スル山形縣參事會ノ裁決不服ノ訴

明治四十三年第二百六十九號
明治四十四年二月二十八日第二部宣告 (請求不立)

判 決 要 旨

一、犯人カ村ノ公金ヲ私消シタル結果一時借入金ヲ返濟スル爲
メ村債ヲ起スハ町村制第六條ニ所謂天災事變ノ爲メ已ム
ヲ得サル支出ノ爲メニ村債ヲ爲シタルモノニ該當ス

(參照) 町村ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災事變等已ムヲ得サル支出若クハ町村永久
ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ増加スルトキハ其町村住民ノ負擔ニ堪ヘサル場合ニ限ルモノトス
(町村制第六條第一項)

原 告 山形縣南置賜郡南原村
長谷部忠三

山形縣參事會
山形縣知事

村債起債ノ要件

被告 馬淵銳太郎 訴訟代理人 下村壽一

原告ノ請求相立タス

理由

按スルニ明治四十年十二月十一日決議ノ南原村村債ハ前收入役渡部瀧衛公金費消ノ結果一時借入金償還ノ必要ニ出タルモノニシテ町村制第六條ノ天災事變等已ムヲ得サル支出云云ノ規定ニ該當シ該村債ヲ起シタルハ同條ニ違背スルモノニアラス而シテ渡部瀧衛所在不明ニシテ私訴ノ判決ヲ執行スル能ハサリシモノナルニ依リ右村債償還金ヲ村税トシテ賦課シタルハ毫モ不當ニアラス要スルニ原告主張ハ其理由ナキニ依リ主文ノ如ク判決ス

●不當裁決取消ノ訴 明治四十三年第二百四十七號 明治四十四年三月七日判決 (請求不立)

判決要旨

一、訴願ニ對スル上級廳ノ裁決權ハ下級廳ノ裁決シタル事項ノ範圍ニ限定セラル、モノニアラス其ノ以外ノ事項ト雖モ之ニ關連スルモノナルトキハ下級廳ニ於テ裁決ヲ經サル事項ト雖モ上級廳之ヲ裁決スルノ權限ヲ有ス

一、日、週、月又ハ年ヲ以テ定メタル期間ノ計算ニ付テハ初日ヲ算入セサルヲ我邦法定期間ノ一般ノ原則トナス從テ市制第二十八條七日ノ期間ハ選舉ノ翌日ヨリ起算シ選舉ノ當日ヲ算入セス

一、第三種所得稅ノ納稅義務(即チ納稅資格)ハ所得稅法第九條ニ依リ政府ノ決定ヲ經タル後ニアラサレハ之ヲ公認スルコトヲ得ス從テ被選舉者カ選舉當日ニ於テ納稅義務アリトノ事實カ此ノ方法ニ依リテ公認セラレサル限りハ確實ニ當選ノ決定ヲナシ得サルモノナレハ選舉前所得額ニ付キ政府ノ決定ヲ經サル者ハ其ノ之ヲ經サル原因カ政府ノ過誤ニ在ルト本人ノ懈怠ニ在ルトヲ不問被選人タルヲ得サルモノトス

(參照) 選舉人選舉ノ效力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選舉ノ日ヨリ七日以内ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得(第三十五條第一項) (市制第二十條第一項)

(參照) 第一種ノ所得金額ハ損益計算書ヲ調査シ政府之ヲ決定シ第三種ノ所得金額ハ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定ス(調査委員會閉會後第三種ノ所得アル者新ニ納稅義務アルコトヲ申出タルトキハ政府其ノ所得金額ヲ決定ス)

上級廳ノ裁決權ノ期間ノ起算ノ納稅資格ノ公認

(所得税法
第九條)

原告 山形縣山形市旅籠町 山形縣參事會
被告 山形縣知事
原告 服部 敬吉
被告 馬淵 銳太郎
訴訟代理人 安保 淺次郎
訴訟代理人 下村 壽
外一名

原告ノ請求相立タス

理由

(二)市制第三十五條第二項ニハ市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ得ヘキコトヲ規定シ市會ノ裁決ヲ經ルニ非サレハ府縣參事會ニ訴願スルヲ得サルハ勿論ナルモ係争事件ニ關係アル以上府縣參事會ノ裁決ヲ市會ノ裁決シタル事項ニ限定スルモノト解スルコトヲ得ス又法律ニ特別ノ規定ナキ限り訴願者カ適法ニ訴願經由ノ手續ヲ履行シタル以上上級廳ハ訴願權アル一切ノ請求事項ヲ裁決スヘキモノナレハ被告カ本案ニ付裁決ヲ爲シタルハ不當ナリト謂フヲ得ス(三)日、週、月又ハ年ヲ以テ定メタル期間ノ計算ニ付キテハ其ノ初日ヲ算入セラレサルヲ我邦法制上ノ一般原則ト認ムヘク而テ市制第二十八條ニハ「選舉ノ日ヨリ七日以内」トアリ同法中起算日ヲ示シタル規定ナキヲ以テ同條ニ依リ訴願ヲ提起シ得ヘキ期間ハ一般原則ニ從ヒ選舉ノ翌日ヨリ起算スヘキモノトス然ラハ市會ニ對スル佐藤由吉ノ訴願カ原告主張ノ如ク六月九日ニ提起セラレタルモノトスルモ尙法定ノ期間内ニ在ルモノニシテ原告ノ主張ハ理由ナシ(四)所得税法ニ於テハ第九條ニ

市會議員選舉違法裁決取消請求ノ訴

明治四十三年第二百五十一號
明治四十四年三月七日判決

(請求不立)

判決要旨

一、選舉ノ規定ニ違背シタルトキハ當選ヲ取消シ更ラニ選舉ヲ行ハシムヘク次點者ヲ當選者ト定ムヘキモノニアラス

原告 山形市諏訪町 佐藤 由吉
訴訟代理人 國野 春吉

選舉ノ取消ト次點者ノ當選

山形縣參事會
山形縣知事
被告 馬淵銳太郎
訴訟代理人 〔下村壽一〕

原告ノ請求相立タス

理由

本訴主要ノ争點ハ市制第二十八條第三項ノ規定ハ選舉ノ效力ニ關スル訴願ニ對シ適用スヘキモノナル否ニ在リ依テ按スルニ市制第二十八條第三項ハ第二項ノ場合ト共ニ第一項ノ訴願ニ對シ選舉ノ規定ニ違背シ又ハ被選舉人中其資格ノ要件ヲ有セサルコトヲ發見シタル場合ニ於ケル處分行為ヲ規定シタルモノナレハ第一項ノ訴願ニ對シ亦適用スヘキモノナルコト論ヲ俟タス而シテ同條第三項ハ選舉ノ規定ニ違背シタルトキハ云云又被選舉人中云云其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選舉ヲ行ハシムヘシト規定シ直チニ次點者ヲ當選者ト定ムヘキ趣旨ニ非サルカ故ニ被告カ服部敬吉ノ當選ヲ取消シ佐藤久五郎ヲ當選者ト定ムヘキ旨ノ原告訴願ニ對シ同條第三項ニ據リ服部敬吉ノ當選ヲ取消シ更ニ選舉ヲ行ハシムトハ裁決ヲ爲シタルハ至當ナリ原告ハ同條第三項ハ取消サルヘキ假決當選者ノ效力ノミニ對スル處分行爲ヲ規定シタルニ止マリ當選順位ニアルモノヲ非當選者ト決シタル不法ヲ争フ場合ヲ豫想シタル規定ニ非スト云フモ此場合モ即チ選舉ノ效力ニ關スル訴願ニ外ナラサレハ第三項ノ適用ヲ受クヘキモノナルハ前掲ノ説明ニ依リ明カニシテ原告所論ハ當ヲ得ス然レハ即チ被告ノ裁決ハ相當ニシテ原告ノ主張ハ理由ナキモノト認ム依テ主文ノ如ク判決ス

市會議員選舉ノ效力ニ關スル訴

明治四十三年第二百六十四號
明治四十四年三月七日第二部宣告

(棄却)

判決要旨

一、市會議員選舉ノ效力ニ關スル訴願ヲ市參事會ニ申立テタルトキハ訴願法第九條第二項ニ謂フ訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マラス同第一項ノ所謂適法ノ手續ニ違背スルモノニ該當ス

神戸市元町通一丁目
原告 野間龜次郎 訴訟代理人 松田源治
兵庫縣知事 外一名
兵庫縣參事會 外一名
服部 一三 訴訟代理人 長瀬貞夫

主文

本訴ハ之ヲ棄却ス

理由

原告ハ明治四十三年四月二十五日提出シタル訴願書宛名ノ肩書タル神戸市參事會ノ文字ハ誤記ナリト主張スルモ同人カ被告ニ提出シタル訴願書中「市制上市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ市

適法ノ手續ニ違背セル訴願

參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任スルモノニシテ市會ノ議事ヲ準備シ其ノ決議ヲ執行スルハ市參事會ノ職務ナリ課税ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決スヘキモノナルヲ以テ市參事會ニ申立ツヘシト規定セル迄ニシテ選舉ノ効力ニ關スル訴願ハ課税ニ關スル訴願ト異ナリ市會ニ於テ裁決スヘキモノナレハ之ヲ市會ニ提出スルハ即チ市參事會ナル故ニ市參事會ニ申立タルモノニシテ法文ニ市長ニ申立ツヘシトアレハトテ直チニ之ヲ不適法トシテ無効視スルハ字句ニ拘泥シタル所論ニシテ云云」ノ記載アルニ依レハ原告ノ明治四十三年四月二十五日附訴願書宛名ノ肩書ハ誤記ニ非スシテ該書ハ市參事會ニ對シテ訴願ヲ爲スノ意思ヲ以テ提出セラレタルモノト解スルノ外ナシ而モ該訴願ノ如キ市會議員選舉ノ効力ニ關スル訴願ハ市長ニ申立ツヘク市參事會ニ申立ツヘキモノニ非サルコト市制第二十八條ニ依リ明ナル所ニシテ該訴願ハ其ノ之ヲ提起スヘキ行政廳ヲ誤リタルモノトス而シテ此ノ如ク其ノ之ヲ提起スヘキ行政廳ヲ誤リタル場合ハ訴願法第九條第二項ニ所謂「訴願書ノ方式ヲ闕クニ止マルモノ」ニ非スシテ同條第一項ニ所謂「適法ノ手續ニ違背スルモノ」ナリトス然レハ原告ノ本訴ハ其經歷ノ途ニ違法アルモノニシテ即チ適法ノ手續ニ違背スルモノナルカ故ニ本案ニ關スル原告ノ主張ノ當否ニ拘ラス棄却スヘキモノトス依リテ主文ノ如ク判決ス

判決要旨

●不當處分取消請求ノ訴

明治四十三年第二百三十九號
明治四十四年三月十日判決

(棄却)

一、各省又ハ内閣ニ訴願シタルトキハ裁決前ト雖モ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス然レトモ右訴願ヲ取下タル時出訴期限ヲ經過セサルトキハ行政訴訟ヲ提起スルヲ妨ケス

原 告 東京市麹町區土手三番町

告 神 谷 保

被 告 仙臺鐵山監督署長

告 福山龜太郎

主 文

訴訟代理人 水野博徳
訴訟代理人 矢部 廉

本訴ハ之ヲ棄却ス

理 由

按スルニ各省大臣ニ訴願ヲ爲シタル後行政訴訟ヲ提起スルモ訴願ヲ取下ケタル時ハ其行政訴訟ハ行政裁判法第十七條第三項ノ規定ニ違背セトスノ事ハ當裁判所ノ判例ナルモ尙審按スルニ右第十七條第三項ノ規定ハ各省又ハ内閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ假令其裁決前ト雖モ同時ニ行政訴訟ヲ提起スルヲ得サルノ法意ナリト解スルヲ相當トス然ハ本件ノ如ク農商務大臣ニ一旦訴願ヲ爲シタル以上ハ其訴願ノ取下ヲ爲シタル事アリトスルモ訴願取下ノ當時ハ出訴期限經過後ニ屬スルヲ以テ右第十七條第三項ノ規定ニ從ヒ行政訴訟ヲ提起スルヲ得サルモノトス依テ主文ノ如ク判決ス

訴願ノ取下ト行政訴訟ノ提起

●家祿處分ニ對スル訴

明治四十二年第四百十四號
明治四十四年四月廿五日判決

(請求不立)

判決要旨

一、家督相續人カ相續以前未タ倅タル身分ヲ有スス裏其ノ勤メ方ニ付キ藩主ヨリ給セラレタル祿ハ明治五年第四十六號布告ニ依リ廢止セラレタルヲ以テ家祿賞典祿處分法ニヨリ其ノ給與ヲ求ムルヲ得ス

廣島縣深安郡福山町字西町
十九番邸士族

原告 吉田 豐文

大藏大臣公爵

被告 桂 太郎

訴訟代理人 南部 皆治

原告ノ請求相立タス

事實

原告陳述ノ要旨ハ原告ノ父豊辰ハ從來家祿七百石ヲ有セシニ慶應元年五月江戸在勤者ト意見ヲ異ニシ塾居隱居申付ケラレ家祿七百石ハ原告ニ下賜セララルコトトナリ明治元年王政復古ニ際シ父豊辰ハ改メテ當主仰付ケラレ家祿七百石ヲ下賜セラレ原告ニハ百俵ヲ給與セラレ勤方は迄通リト

家祿賞典祿處分法適用ノ範圍○士族倅ノ勤方ノ給祿

仰付ケラレタリ然ルニ右百俵ノ給祿ニ對シテハ金祿公債ノ處分ヲ受ケサリシヲ以テ玆ニ本訴ヲ提
起スト云フニ在リテ被告ノ答辯ニ對シテハ父豐辰ハ新ニ一戸主ニ取立テラレ原告モ亦一戸主トシ
テ各別ニ家祿ヲ給與セタレタルモノナリト主張セリ
被告答辯ノ要旨ハ原告ハ父豐辰ノ家名ヲ承繼スルト同時ニ其家祿ヲ承繼シ此祿高ニ基キ適法ニ處
分ヲ受ケタルモノニシテ原告ハ別ニ明治元年以後給米百俵ヲ受ケタリト稱シ明治三十年法律第五
十號ニ依リ之レカ給與ヲ出願スルモ其受ケタリト稱スル給米ハ俸ノ身分ニテ有シタルモノニシテ
家祿ニアラサルヲ以テ明治五年第四十六號布告ニ依リ當然廢止セラレタルモノナリ
右ノ理由ニ依リ被告カ願意採用シ難キ旨指令シタルハ正當ノ處分ナルヲ以テ原告ノ請求ハ之ヲ排
斥セラレタシト云フニ在リ

理由

原告ハ父豐辰ハ新ニ一戸主ニ取立テラレ原告モ亦一戸主トシテ各別ニ家祿ヲ有シタリト主張スル
モ甲第一號證舊福山藩廳達書ニ依レハ「父水山儀當主被仰付家祿七百石無相違被下置再勤被仰付
候付助左衛門儀更ニ百俵被下置勤方是迄之通被仰付旨被仰出候」トアルハ原告即チ助左
衛門ノ當主ヲ罷メ再ヒ父豐辰ニ當主ヲ申付ケ原告ニハ勤方ニ對シ百俵ヲ給與セラルルコトナリ
タルモノニシテ父豐辰カ別ニ一家ヲ創立シタルモノト認メ難キノミナラス乙第一號證ニハ「吉田
豐辰家督豐文」トアリ乙第二號證隱居家督死亡遺跡再相續竝一代限足米減御届添書ニハ「深津郡福
山父豐辰隱居家督吉田豐文」トアリ又乙第三號證戶籍謄本ニハ「戸主亡父豐辰長男吉田豐文」ト

アルヲ以テ見レハ原告ハ豐辰ノ長男ニシテ父豐辰ノ家督ヲ相續シタルモノニシテ豐辰ノ家族ナリ
シコト明瞭ナルニ依リ甲第一號證ノ給與ハ俸ノ身分中其勤方ニ對シ給與セラレタルモノト認ム而
シテ俸ノ身分中給與セラレタル祿ハ明治五年第四十六號布告ニ依リ廢止セラレタルヲ以テ其請求
ハ理田ナキモノトス

以上ノ理田ニ依リ主文ノ如ク判決ス

復祿請求ノ訴

明治四十二年第七百九號
明治四十四年四月二十六日第一號宣告

(棄却)

判決要旨

一、寺院ノ給祿ハ家祿及ヒ賞典祿トハ全然別種ノモノナルヲ以
テ家祿賞典祿處分法ノ適用ヲ受クヘキモノニ非ス

原告 青森縣弘前市大字銅屋町
六十三地地
最勝院住職
鷲尾照堯
外三十七名
訴訟代理人 平澤均治

被告 大藏大臣公爵
大藏大臣公爵
太郎
訴訟代理人 矢部 廉

主文

本訴ハ之ヲ棄却ス

寺院ノ給祿ノ性質

事實及理由

原告陳述ノ要旨ハ原告等各寺院ハ舊津輕藩ニ於テ藩廳ヨリ草高數石乃至數百石ヲ給與セラレ明治三年九月十日藩制施行以後同四年迄ハ從來ノ祿高ニ基キ現米ヲ以テ給與セラレタレトモ明治五年ニ至リ祿高ニ相當スル給與ヲ廢止セラレタリ依テ明治三十年法律第五十號ニ依リ被告ニ對シ給與未濟額ノ下付ヲ申請シタルニ不許可ノ處分ヲ受ケタルヲ以テ該處分ヲ取消シ各原告ニ對シ相當額ノ公債證書ヲ下付セラレタシト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ原告ノ請求ニ係ル給祿ハ寺院ノ有セシ祿即チ寺祿ニシテ家祿賞典祿處分法ノ範圍外ナルヲ以テ本訴ハ之ヲ却下セラレタシト云フニ在リ

按スルニ原告ノ請求ニ係ル各寺院ノ給祿ハ謂ユル寺祿ニシテ家祿又ハ賞典祿ト見ルヘキモノニ非ス原告ハ舊弘前支廳ニ於テ寺院ノ給祿ハ卒族ノ給祿ト同様ノ取扱ヲ爲シタルコトヲ主張シ之ヲ該支廳ニ於ケル卒給祿渡帳ヲ以テ立證スト雖モ舊弘前支廳カ卒族ノ給祿ト寺祿トヲ同一帳簿ニ記載シ其ノ取扱ヲ同フシタルモノアリトスルモ之ヲ以テ寺院ノ給祿ハ卒族ノ給祿ト同性質ノモノナリト認ムルヲ得ス而シテ寺院ノ給祿ハ寺祿トシテ家祿及賞典祿ト全ク別種ノ祿制ヲ定メ且之カ處分ヲ了シタルコトハ明治四年六月十七日布告及明治七年第九十二號布告等ニ依リ明ナリ然レハ本訴ハ家祿賞典祿處分法ノ適用ヲ受クヘキモノニ非サルヲ以テ行政裁判法第二十七條ニ依リ受理スヘキ限ニ非サルモノトス

依テ主文ノ如ク判決ス

○家祿賞典祿處分ニ關スル訴

明治四十三年第五百十三號
明治四十四年五月一日第一號宣告 (棄)

判決要旨

一、明治三十年法律第五十號家祿賞典祿處分法第一條ハ藩制施行以後ノ祿高ニ錯誤アリシカ爲メ明治九年ノ公債處分ニ際シ相當額ノ給與ヲ受ケサリシ者ニ限り適用セララルヘキモノトス

一、明治九年ノ公債處分前ニ相當ノ理由ニ依リ沒祿セラレタル者ニハ家祿賞典祿處分法ヲ適用スルヲ得ス

一、明治二十七年法律第二十號ニ基ク特別給與金處分ニ關シテハ縱令給與ニ不足アリトスルモ是ニ行政訴訟ヲ許シタル規定ナシ

佐賀縣佐賀市大字西田
代町六十二番地
原告 村山長平

家祿賞典祿處分法第一條ノ適用○特別給與金處分ニ對スル行政訴訟

大藏大臣公爵
被告 桂 太郎
訴訟代理人 芹澤孝太

本訴ハ之ヲ棄却ス

事實及理由

原告請求ノ要旨ハ原告ハ亡養父長榮カ明治七年佐賀戰役ノ際除族ノ上死刑ニ處セラレタル所明治二十七年法律第二十號ニ基キ金千八百八十三圓九十二錢三厘ノ給與ヲ受ケタルモ尙給與不足アルヲ以テ之カ給與ヲ請求スト云フニ在リ
被告答辯ノ要旨ハ原告ノ請求ハ明治三十年法律第五十號第一條ノ「明治九年八月太政官第百八號布告及同年十二月太政官第百五十二號布告施行ノ際其祿高ニ對スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若クハ相當額ノ給與ニ不足アル者」ト云フニ該當セス且原告ハ明治三十年法律第五十號發布ノ際同法ニ基キ家祿ノ給與ヲ受ケタキ旨出願シタリト雖其ノ請願書ニ記載セル趣旨ハ本訴ニ於テ主張スル所ト相異シ本訴ニ謂フ所ハ同請願ニ際シ曾テ之ヲ主張シタルコトナシ故ニ本訴請求ハ明治四十二年法律第二十一號第一條ニ依リ出訴ヲ許サレタル限リニ在ラスト云フニ在リ
按スルニ明治三十年法律第五十號家祿賞典祿處分法第一條ハ藩制執行以後ノ祿高ニ錯誤アリシカ爲明治九年ノ公債處分ニ際シ相當額ノ給與ヲ受ケサリシ者ニ付適用セラルルモノナリ然ルニ本訴ニ於ケル原告亡養父ハ右公債處分前ニ於テ適法ニ沒祿セラレタルモノニシテ祿高ニ關スル錯誤ア

リタルカ爲メ相當額ノ給與ヲ受ケサリシ者ト云フニ該當セス從テ家祿賞典祿處分法第一條ノ適用ヲ受クヘキモノニ非ズ而シテ明治二十七年法律第二十號ニ基ク特別給與金支給處分ニ關シ假令給與不足アリトスルモ該處分ニ對シテハ別ニ行政訴訟ヲ許シタル法令存セサルヲ以テ本訴ハ行政裁判法第二十七條ニ依リ受理スヘキ限リニ非サルモノトス依テ主文ノ如ク判決ス

●家祿賞典祿處分ニ依ル祿高給與請求ノ訴

明治四十三年第二百二十五號
明治四十四年五月一日第一部宣告

(請求不立)

判決要旨

一、家祿賞典祿處分法第一條ハ舊藩中ヨリ引續キ祿ヲ有シ又ハ有スヘキ者カ祿高調査ニ錯誤アリタル爲メ金祿公債ノ支給洩レ又ハ支給不足トナリタル者ニ對シ之カ救濟ヲ與フルノ趣意ナルヲ以テ藩制執行以後一時祿高ヲ有シタリトスルモ舊藩中既ニ無祿者ト爲リタル者ニ對シテハ本條ノ適用ナシ一、舊藩主カ其ノ臣下ノ祿ヲ廢スルニ當リ更ラニ他日ヲ期シテ相當ノ授祿ヲナスヘキヲ以テシタリトスルモ藩制施行前ニ

家祿賞典祿處分法第一條ノ適用○家祿賞典祿處分施行法第一條第二號ノ適用

授祿ナキ家祿賞典祿處分施行法第一條第二號ニ依リ公債ヲ
請求スルノ權利ナキモノトス

二五

原 告 兵庫縣水上郡佐治村
小島友吉

被 告 大藏大臣公爵
桂 太郎 訴訟代理人 南部 皆治

主 文

原告ノ請求相立タス

事 實

原告陳述ノ要旨ハ原告ノ亡祖父忠太ハ丹波國水上郡柏原藩主織田氏ニ仕ヘ儒員トナリシカ甲第一
號證ノ如ク文久三年八月用人格ニ列セラレ祿百石ヲ賜ヒ政務ニ參與シ明治二年八月甲第二號證ノ
通り藩主ヨリ亡父四郎兵衛ニ對シ俸二口ヲ賜フ翌三年九月藩制施行四年廢藩置縣ニ付其九月藩主
籍ヲ東京ニ移サル是ニ於テ亡祖父ハ致仕シテ故山佐治村ニ歸老セリ此時藩主ヨリ扶持方二個年分
二十石ヲ給與セラレ「尙一定ノ規則相立テ候上相當ノ處分スヘシ」トノ書付ヲ下付相成リタル儘
ニテ爾來何等ノ處分ヲ受ケタルコトナシ其後祿高ニ關スル布告アリタルモ父四郎兵衛ハ明治五年
ニ死亡シ祖父忠太ハ清貧自ラ安ンシ敢テ給與ノ請願ヲ爲サス十七年ニ至リ死亡セリ然ルニ明治三

七四

十年法律第五十號家祿賞典祿處分法ノ發布アリ原告ハ其家名承繼人ナルヲ以テ家祿追給ノ請願ヲ
爲シタルニ被告ニ於テ願意採用シ難シトノ處分ヲ爲シタルハ不當ニ付一定ノ申立ノ如ク判決ヲ請
フト云フニアリ

七五

被告答辯ノ要旨ハ原告ノ祖父忠太ハ立藩中藩主ノ權限内ニ於テ適宜ノ處分ニ依リ歸老シタルモノ
ナレハ今更家祿ヲ請求シ得ヘキモノニアラス假ニ原告ノ云フ如ク此歸老ニ付テハ追テ相當規則ニ
照シ相當ノ處分ヲ爲ス可シトノ條件ヲ附シタルモノナリトスルモ其後此ノ如キ規則ノ立テタルコ
トナケレハ條件ノ到來セサルモノナリ又假リニ藩制施行後家祿ヲ有シタリトスルモ明治九年太政
官第百八號布告及同年第百五十二號布告施行前既ニ歸老シ此等布告ニ依リ給與ヲ受クルノ權利ヲ
拋棄シタルモノナレハ本訴請求ヲ爲スノ餘地ナシ又原告ノ父四郎兵衛ノ享有セシ二人扶持ハ明治
四年九月晦日ノ布告ニ依リ當然廢止セラレ原告ノ請求ハ孰ツレモ理由ナキヲ以テ其請求ヲ排斥セ
ラレ度ト云フニアリ

理 由

按スルニ甲第三號證ニハ「小島忠太郎歸商ノ趣聞屆候依之相當ノ手當可差遣ノ處未其規則不相立
候間先現今差遣屆候扶持方二十石二個年分一度ニ差渡候云云」トアリ又乙第一號證祿高取調帳ニ
ハ明治三年歸農當時祿高帳除キ有之旨申戌九月十九日屆士族小島忠太「トアリ又乙第二號證當
時貫族人員不照合廉届書ニハ「舊柏原藩小島忠太是ハ舊官員取亂候處元二十石取ニテ明治己年祿
高帳ニ記載差出候得共翌明治三年歸農即今祿高帳ニハ無之趣届出候」トアルニ依リ原告ノ祖父

家祿賞典祿處分法第一條ノ適用○家祿賞典祿處分施行法第一條第二號ノ適用

二五

忠太ハ廢藩置縣前藩主ノ許可ヲ受ケ故郷佐治村ニ歸農シ祿ヲ失ヒタ者ノト認ム而シテ原告ハ家祿賞典祿處分法第一條ニ「明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家祿賞典祿ヲ有シタル者云云」トアルヲ理由トシテ藩制施行以前ニ歸農シタル者ハ格別原告ノ如キ藩制施行以後ニ歸農シタル者ハ藩制施行以後現ニ祿高ヲ有シタルモノナレハ本法ニ祿高公債ヲ請求シ得ヘキ確的ノ權利アリト主張スルモ本條ニハ「明治四年七月二十四日祿高ニ關スル太政官布告ニ依リ調査シタル以後ノ祿高及其ノ調査以前ニ係ル藩制施行以後ノ祿高ニ錯誤アルトキハ云云」トアリテ舊藩中ヨリ引續キ祿ヲ有シタル者又ハ引續キ有ス可キ者カ祿高調査ニ錯誤アリテ無祿者又ハ少祿者ト誤認セラレ隨ツテ明治九年八月金祿公債證書支給ノ際支給洩レ又ハ支給不足ト成リタル者ニ對シ救済ヲ與フルノ趣旨ナルコト明瞭ナレハ原告ノ祖父ノ如キ藩制施行以後一時祿高ヲ有シタルコトアルモ舊藩中既ニ無祿者ト成リタルモノハ祿高調査ニ錯誤アリタリト云フヲ得サルヲ以テ公債證書請求ノ權利ナキモノトス原告ハ又甲第三號證ニ「尙一定ノ規則モ相立候上ハ相當ノ處分可致候事」トアルニ依リ亡祖父歸農ノ當時藩主ニ於テ祿高相當ノ給與ヲ爲サントセシモ當時恰モ廢藩置縣ニ際シ祿高處分ニ關スル制度未タ定マラス從ツテ一定ノ標準ナキニ依リ不取敢一時扶持方ニケ年分ヲ給與シ他日制定セラル可キ一般法ノ規定即祿高處分ニ關スル法令ノ公布ニ依リ相當ノ處分ヲ爲サントスルノ趣旨ニシテ其權利義務ノ承繼者タル政府ニ於テ相當ナル祿高處理ヲ爲サル可ラスト主張シ公債證書請求ノ權利アルカノ如ク論スルモ明治九年八月太政官第八號布告ハ該布告發布ノ當時現ニ家祿ヲ有シタル者ニ對シ一時ニ公債證書ニ換算支給スルノ制度ヲ定メタル者ニシテ原告ノ如キ

七六
七七

該布告施行ノ當時祿高ヲ有セサル者ハ請求ノ權利ナキハ勿論家祿賞典祿處分法第一條ハ前項説明ノ如ク是亦原告ノ如キ舊藩中既ニ無祿者トナリタル者ニ對シ公債請求ノ權利ヲ與ヘタルモノト解ス可ラサルノミナラス家祿賞典祿處分施行法第一條第二號ニハ「但各藩ニ於テ定メタル制度中他日ノ改正ヲ期シタルモノハ之ヲ問ハズ」トアリテ舊藩中祿高ニ對シ他日相當ノ處分ヲ爲ス可キ旨定メアルモ公債請求ノ權利ナキコトヲ明瞭ニ規定シアルヲ以テ原告ノ主張ハ之ヲ採用スルニ由ナキモノトス

原告ハ又甲第二號證ニ「依之乍聊二人口差上候間養子四郎兵衛へ御贈可被成候」トアルニ依リ原告ノ亡父四郎兵衛カ二人扶持ヲ受ケタルコトヲ證シ舊藩中扶持米ノ支給ヲ受ケタルモ廢藩後何等ノ支給ナキヲ以テ家祿賞典處分法ニ依リ公債請求ノ權利アリト主張スルモ右二人扶持ハ亡祖父ノ歸老ト同時ニ消滅シ公債請求ノ權利ナキハ前記説明ノ通りニシテ假令廢藩後支給ヲ受ケタルコトアリトスルモ倅ノ身分ニテ支給ヲ受ケタルニ過キサレハ明治五年二月第四十六號布告ニ依リ當然廢止ニ屬スルヲ以テ前主張ヲ採用スルヲ得ス

以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

●家祿金追渡請求ノ訴 明治四十二年第三百四十一號 明治四十四年五月二十九日判決 (請求不立)

判決要旨

一、佐賀藩ニ於テハ明治二年十一月ノ祿制改革ニヨリ領内各團

舊佐賀藩ニ於ケル各團給ノ改竄

結ハ佐賀本藩ノ制ニ則トリ士卒族ノ家祿ヲ改定シタルモノ
 ナレハ舊佐賀領ノ一團タル久保田團ニ於テモ別段ノ證據ナ
 キ限りハ同一ノ改祿アリタルモノト認メサルヲ得ス
 一、家祿賞典祿處分法ニヨリ今日家祿ノ給與ヲ請求センニハ明
 治四年祿高調査ノ際藩吏カ錯誤ニヨリ減祿又ハ没祿シタル
 事實アルヲ必要トスルモノニシテ所屬藩主ヨリ減祿又ハ没
 祿セラレタル者ハ之ヲ請求スルコトヲ許サス
 一、獻米ヲ得ル爲メ藩ニ於テ領内士族ノ各祿高ヨリ部掛米ヲ控
 除シ其ノ殘額ヲ以テ祿高トナスノ制ヲ執行シタルトキハ明
 治九年ノ金祿公債ノ支給ハ其ノ改定セラレタル祿高ヲ標準
 トスヘク減削以前ノ祿高ヲ標準トスヘキモノニアラス

原 告 佐賀縣佐賀市大字松原町 訴訟代理人兼原告 鍋島牛八郎
 告 山崎文三 外十三名

被 告 大藏大臣公爵 訴訟代理人 芹澤孝太郎
 告 桂 太郎

主 文
 原告ノ請求相立タス

事 實

原告陳述ノ要旨ハ原告等ハ舊佐賀藩久保田團所屬ノ士族ニシテ藩制施行以後祿高取調帳記載ノ現
 米高ニ依ル家祿ヲ有シ別ニ祿高ノ改減セラレタルコトナキニ同藩ハ從來藩費不足ノ爲メ士卒ノ家
 祿中ヨリ部掛ヲ以テ獻米ヲ爲サシメ來リタルカ爲明治四年祿高調査ノ際各自ノ給祿高ヨリ右獻米
 ヲ控除シタル殘高ヲ以テ家祿ナリト誤認セラレ從テ明治六年家祿奉還ノ際又ハ明治九年金祿公債
 處分ノ際祿高ニ相當スル給與ヲ受ケサリシヲ以テ其ノ不足額ヲ請求スト云フニ在リ
 被告答辯ノ要旨ハ舊佐賀藩ニ於テハ明治二年其ノ祿制ヲ改メ從前ノ給祿高ヨリ部掛米ヲ控除シテ
 現實各士卒ノ所得トナリ居ル石數ヲ標準トシ更ニ部制ノ法ヲ定メテ之カ幾部ヲ減殺シタル殘額ヲ
 以テ士卒ノ給祿高トスルノ制ヲ定メ同時ニ同藩所屬ノ各團結モ亦本藩ノ旨ヲ受ケテ其ノ祿制ヲ改
 正シタル事蹟アルヲ見ル故ニ右明治二年改正以前ノ祿高ヲ本トシテ明治六年若クハ明治九年ノ家
 祿處分ニ際シ給與不足アリトスル原告ノ主張ハ原告之ヲ是認スルヲ得サルヲ以テ原告ノ請求ヲ棄
 却セラレタシト云フニ在リ

理 由

舊佐賀藩ニ於ケル各團結ノ改祿

原告等ハ明治三年九月十日藩制施行以後其ノ祿高取調帳記載ノ現米高ニ依ル家祿ヲ有シタルニ明治四年祿高調査ノ際藩吏誤テ過大ノ減祿ヲ爲シタリト主張スレトモ原告等ニ於テ右現米高ニ依リ給祿セラレタリトノ證據ヲ徵スヘキモノナキノミナラス明治四年祿高調査ノ際藩吏カ錯誤ニ基テ減祿シタリトノ證據ヲ提供セサルヲ以テ原告ノ主張ハ之ヲ確認スルニ由ナク寧ロ却テ原告等ノ祿高取調帳ノ記載ノ改正米高ハ當時藩吏ノ錯誤ニ出テタル減祿高ニ非スシテ原告等所屬ノ久保田團ニ於テ行ヒシ適法ナル改正祿高ナリト認ムヘキ理由アリ按スルニ舊佐賀藩ハ明治二年十一月其ノ祿制ヲ改革シ同時ニ領内各團結ニ命シ仕組相立伺出ヘキ旨ヲ達シタルニ依リ各團結ハ大體ニ於テ佐賀本藩ノ制ニ則リ士卒族ノ家祿ヲ改定シタルモノニシテ本訴ノ久保田團ニ付テハ該仕組書ノ今日之ヲ徵スヘキモノナキヲ以テ如何ナル算法ニ依リ如何ニ改祿ヲ行ヒシヤヲ知リ難シト雖佐賀藩ニ於ケル改定祿制並他ノ諸團結ニ於ケル仕組書等ニ付之ヲ見ルモ本團結ニ至リテモ亦恐ラク佐賀本藩ニ於テ「是迄現收納高ニ因テ御斟酌別冊之通割將又切米御扶持方取以來落米別冊之通被相達候云云」ノ制及他諸團結カ其ノ收納米ヲ元トシ基ノ内ヨリ獻米自俸士卒給祿社寺料ヲ引キ其ノ殘米ヲ軍團費學校費等ニ配當シタル例ニ倣ヒ仕組ヲ立テ其ノ團收納高ヨリ先獻米及團主ノ自俸ヲ控除シテ適宜士族卒ノ改祿ヲ爲シタルモノト察スヘキナリ然レハ祿高取調帳記載ノ改正米高ハ他ニ之ヲ覆スノ理由及證據ナキ限久保田團ニ於テ適法ニ改定シタル祿高ナリト認ムヘク之ヲ以テ藩吏ノ錯誤ニ依ル減祿高ナリトシ又ハ獻米ト現收米トノ關係ノ誤認ニ基ク錯誤處分ナリト斷スルヲ得ス要スルニ原告ノ請求ハ確證ノ據ルヘキモノナク其現由ナキモノトス依テ主文ノ如ク判決ス

●不當處分取消家祿典賞ニ對スル公債證書給與請求ノ訴

明治四十二年第六百八十五號
明治四十四年五月十五日第一號宣告 (請求不立)

判決要旨

一、家祿典賞給與出願ノ處分ニ對シ行政訴訟ヲ提起スルニハ民事訴訟法ノ伸張期間ヲ加算スルコトヲ得

熊本縣球磨郡一武村三千四百十五番地士族

原告 高田本吉

訴訟代理人 小笠原勇藏

被告 大藏大臣公邸

被告 桂太郎

被代理人 鈴木充美

主文

原告ノ請求相立タス

原告陳述ノ要旨ハ原告等ハ舊人吉藩士ニシテ從來藩主相良家ヨリ夫夫家祿ヲ給與セラレ尙ホ明治元年戊辰戰爭ノ際軍功ニ依リ賞典祿ヲ給ハリタリ然ルニ明治九年太政官第百八號布告施行ノ際公債證書支給不足ト成リタルニ付キ計算書記載ノ如キ公債ヲ下付スヘキ様判決ヲ請フト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ第一高田本吉外二十三名ノ請求ニ係ル賞典祿ニ對シテハ政府ハ嘗ツテ賞典祿ヲ受ケタルコトヲ認メス第二相良玄碩外一名ノ請求ニ係ル家祿ニ對シテハ藩制施行以後家祿ヲ有シタル

家祿典賞給與出願處分ニ對スル出訴期間

コトヲ認メス第三右田一外五名ノ追加訴訟ハ期限過後ノ訴訟トシテ却下セラル可キモノニシテ要スルニ原告ノ請求ハ理由ナキニ依リ之ヲ棄却サレタシト云フニ在リ

理由

原告ハ從來藩主相良家ヨリ夫夫家祿ヲ給與セラレ又明治元年ノ戦功ニ依リ賞典祿ヲ賜ハリタルニ明治九年太政官第百八號 告施行ノ際公債證書支給不足トナリタリト陳述スルモ何等ノ證據ヲ提出セサルヲ以テ其主張ヲ採用スルニ由ナシ被告ハ右田一外五名ノ追加訴訟ハ民事訴訟法ハ仲長日數ヲ加算スルトキハ出訴期限内ナリト雖モ明治四十二年法律第二十一號ニ依ル行政訴訟ハ仲長日數ヲ加算スヘキモノニアラサレハ本訴訟ハ却下セラルヘキモノナリト主張スルモ同法第二條ニハ「前條ノ規定ニ依リ出訴セントスル者ハ本法施行ノ日ヨリ六個月以内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス」トアルノミナレハ行政裁判法第二十二條第二項ノ除外例ヲ設ケタルモノト解ス可ラサルヲ以テ本抗辯ハ之ヲ採用セズ以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

●鑛業試掘願ニ關スル不許可處分ニ對スル訴

明治四十三年第十六號乃至第十八號
明治四十四年五月十五日第三部宣告 (請求不立)

判決要旨

一、鑛業試掘出願地ニ適當ノ除害方法ナク有害ノ坑水流出シ土

地住民ノ飲料用水ニ有害ナルトキハ鑛業法第三十二條ニ所謂公益ヲ害スルモノニ該當ス從テ之レニ對シ鑛山監督署長カ不許可處分ヲ爲スモ違法ニアラス

(參照) 公益ヲ害スルモノト認メタルトキ又ハ鑛業ノ價值ナシト認メタルトキハ鑛業ノ出願ヲ許可セス(鑛業法第三十二條)

原 告 東京市牛込區天神町 沼田字源太
富 樫 清 富 塚 政 馬
外二名 訴訟代理人 鳩山 一和 夫 郎
被 告 仙臺鑛山監督署長 鳩山 一和 夫 郎
福山龜太郎 訴訟代理人 太田 資 時

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

本件試掘出願地ハ孰レモ砂子澤ノ上流ニアツテ小坂鑛山住民ノ常用スル飲料水水源地ナルコトハ原告ノ争ヒナキ所ナリ而シテ鑑定人鈴木録之助ノ鑑定書ニ依レハ「出願地ノ鑛脈ハ銅亞鉛及硫化鐵鑛ヲ含有スルモノニシテ其探掘上ヨリ生スル坑水ハ清水ト混和シテ之ヲ有害水トナスハ免ル能ハス」トアリテ同人ノ當公廷ニ於ケル陳述モ亦此趣旨ニ外ナラサレハ本件除害工事ニシテ不完全ナルニ於テハ小坂住民ノ飲用水ニ有害水ヲ流下スルコトハ勢免レサル所ナリト謂ハサルヲ得ス而シテ實地臨檢ノ結果ニ依レハ本件出願地ハ砂子澤ノ上流ニ位シ該地ヲ流過スル溪流ハ總テ砂子澤ニ注流スル地

鑛業法第三十二條ニ所謂公益ヲ害スル場合トハ如何

勢ニシテ原告カ掘鑿セムトスル鑛坑ハ孰レモ溪流ニ沿ヒ其兩岸ノ傾斜極メテ急峻ナルヲ以テ開坑ノ結果坑口ヨリ流出スヘキ有害水ハ直ニ溪流ニ注入スヘキ形狀ヲ示スト同時ニ除害工事を施スニ適當ナル場所ナク假ニ工事ヲ施シ得トスルモ一朝雨雪ノ變ニ際會スルトキハ容易ニ破壊若クハ埋沒セラレテ用ヲナササルヘキ地勢ニ在ルノミナラス鑑定人西山省吾ハ原告ノ除害工事設計ハ不完全ニシテ有毒水ノ澤流ニ流入スルヲ防ク能ハサル旨陳述シ鑑定人鈴木録之助ハ原告ノ除害工事をタルヤ方法ニ於テ當ヲ得タリト雖未タ以テ完全ナリト云フヲ得スト鑑定シタルニ依レハ原告ノ除害設計ハ到底完全ナル除害方法ト認ムルヲ得ス鑑定人鈴木録之助ハ金山澤ニ付テハ鑑定書ニ「原告選定以外ノ地ニシテ適當ト認ムル敷地ハ金山澤アイヲカ澤ノ出會點以南砂子澤ノ東岸緩傾斜ノ地ニ工事ヲ起サハ其目的ヲ達スルヲ得ヘシ」云云カクテ澤ニ付テハ「此水路ノ如キ千分ノ一ハ緩ニ過クルヲ以テ之ヲ五百分ノ一ノ勾配トナシ」云云ニ澤共ニ原告ノ設計ニ多少ノ變更ヲ加フルトキハ除害ノ目的ヲ達シ得ヘキカ如ク鑑定スレトモ出願地ハ前記ノ如キ地勢ナルヲ以テ之ヲ信用スルヲ得ス鑑定人西山省吾ハ金山澤及カクテ澤ニ付テ原告設計ト別様ノ設計及豫算ヲ示シ除害ノ目的ヲ達シ得ヘキカ如ク鑑定スレトモ出願地ハ前記ノ如キ地勢ナルノミナラス試掘ノ爲鑑定人カ示ス知キ費用ヲ投シテ除害工事を施スカ如キハ他ニ類例ナク殊ニカクテ澤ノ出願地ハ無價值同様ナリトハ同鑑定人ノ陳述スル所ナレハ該設計ハ實行シ得ヘカラサルモノニシテ同鑑定人ノ此點ニ關スル鑑定ハ信用スルヲ得ス

明治四十三年第十七號事件ニ付テハ被告ハ原告ヨリ除害工事設計書ヲ徵セサルモ本試掘出願地ハカクテ澤及金山澤ノ各出願地ノ中間ニ介在シ該出願地ニ於ケル澤流ハ孰レモ皆砂子澤ノ上流ニシテ

此地ノ地勢モ右カクテ澤及金山澤出願地ト地勢ノ狀況大差ナキコトハ害地ノ狀況及鑛區圖ニ參照シテ之ヲ推知スルヲ得ヘシ然ラハ被告ニ於テ該出願地ニ對シ原告カ縦ヒ除害工事を設計ヲ爲スモ前示兩出願地ニ對スルモノト等シク完全ナル除害方法ナキモノト認メタルハ至當ト云ハサルヲ得ス前示ノ如ク本件出願地ニ對シ適當ノ除害方法ナク砂子澤ノ上流ニ於テ有害ノ坑水之ニ流入スル上ハ其下流ニアル小坂鑛山住民ノ飲料用水ニ對シ有害ナリト認メサルヲ得ス然レハ被告カ本件出願地ニ對シ公益ヲ害スルモノト認メ鑛業法第三十二條ニ依リ原告ニ對シ不許可ノ處分ヲ爲シタルハ相當ナリトス

●國有土地下戻請求ノ訴 明治四十一年第三百三十號 明治四十四年四月七日判決 (請求相立)

判決要旨

一、境内除地トハ社寺境内ニ屬シ貢租ヲ免際セラレタル土地ナク云フ此ノ土地ハ反對ノ證據ナキ以上ハ社寺ノ所有トス

說明

凡ソ租稅ハ民地ニ對シテ之ヲ課シ公有地ニ課セサルヲ以テ一般ノ原則トス故ニ此ノ點ヨリ觀察スルトキハ租稅ヲ納附セサル土地ハ寧ロ之ヲ公有地ナリト推斷スルヲ以テ至當ナルカ如シ然レトモ其ノ租稅ヲ納附セサル原因カ官ヨリ特ニ免

除地トハ如何

租セラレタルカ爲メニ基クキハ其ノ土地ヲ民有ト認ムルヲ當然トス河トナレハ凡ソ免租ナルモノハ其ノ地カ民有ニ屬シ租ノ土地ナルカ爲メニ起ルモノニシテ若シモ其ノ土地カ官地ナリシトセシテ免租ナルモノモハ免租ト云フトキハ結極其ノ地カ民有ニ屬スルヲ證スルニ足ルモケレハナリ故ニ免租ト云フトキハ結極其ノ地カ民有ニ屬スルヲ證スルニ足ルモルニシテ社寺ノ境内地タルト然ラサルト問ハス凡テ免租地ハ之ヲ私有ト認ムルヲ相當トス

原告 東京市深川區深川公園
東京府社 富岡八幡神社

右代表者 同神社司 富岡 宣永 訴訟代理人 高木益太郎
外三名 番 磨 辰 治 郎

被告 内務大臣男爵 平田 東助 訴訟代理人 原 嘉 道

主 文
被告ハ東京市深川區深川公園地一萬九千三百三十坪七合五勺同市同區富岡門前東仲町六番地官有第一種富岡八幡神社末社竈神社所在地六坪二合五勺同市同區富岡前仲町四十八番地同神社末社軍神社所在地九坪二合七勺五才ヲ原告ニ下戻スヘシ

理由 由
係争地三筆ノ原告神社舊境内タリシ事實ハ被告ノ争ハサル所ナリ然ルニ被告ハ右舊境内ハ原告神社

カ私費若ハ寄附ニ依リ埋立開墾セシモノナリトノ事實ヲ認ムルニ足ラスト云フモ新甲第二號證「八幡社内四方圍堀石土留之圖」附箋ニ於ケル「此所西南折返シ百三十九間寄進靈巖島氏子中」此所北側四十四間餘諸人奉納金ヲ以テ自普請「此所東北折廻シ末極月出來寄進」トノ記事新甲第五號證ノ一「地誌調書上帳ニ於ケル」代地東梅邊自力次第築立候様伊奈半十郎殿被仰渡云云「至中興周光自力築立ノ外云云」トノ記事甲第十七號證「當寺舊記」中第三十六第五十三第七十三第七十四第七十六項等ノ記事ニ徵スレハ原告神社舊境内ハ原告神社ニ於テ其自費又ハ寄附ニ依リ之ヲ埋立テ修築セシモノト認ムルヲ相當トス而シテ又係争地ノ原告神社ノ拜領地タルハ新甲第十二號證「拜領除地社寺帳」ニ「拜領地境内六萬五百八坪永代寺」トアルニ依リ明白ナルモ被告ハ「拜領」ナル文詞ハ「公領」ノ意義ニモ使用セラルルコトアルニ依リ之ニ依リ直ニ原告神社私有ノ事實ヲ認メ難シト云フモ新甲第五號證ノ一「地誌調書上帳」並ニ新甲第六號證「富賀岡縁起其外書附」中ニ於テハ「社地境内被下置候」トノ記事アリ之ヲ前記ノ舊境内私費埋立修築ノ事實ト對照スレハ甲號證中ニ於ケル「拜領」ナル文詞ハ所有權下付ノ意義ニテ使用セシモノ隨テ原告神社ハ徳川家ヨリ舊境内地ノ所有權ヲ下付セラレタルモノト認ムルヲ相當トスルノミナラス新甲第十五號證ノ二「地誌調書上帳」中ニハ「境内貸地」ニ關スル記事アリ甲第七號證ニハ「當社内江從來地借罷在候云云」トノ記事アリ又新甲第七號證「御門前町屋敷地割帳」ニハ「表五間口裏二十間但屋敷一人分也右之年貢代毎年十月切ニ急度指上ケ可申候也已後此所繁昌次第年貢代増可申候事」等ノ記事アルニ依レハ原告神社ハ舊境内ノ一部分ヲ料金ヲ徵シ他ニ貸與セシ事實即チ所有權實行ノ事蹟ヲ認ムルニ足ルモノトス其他新甲第三

除地トハ如何

號證ニハ「一舊除地六萬五百八坪」トノ記事アリ同第四號證ニハ「當社除地六萬五百八坪之内門前町云云」トノ記事アリ同第九號證ニハ「富岡八幡神社舊社領除地之儀ハ云云」富岡八幡神社舊社領除地一、六萬五百八坪」トノ記事アルニ依レハ係争地ハ原告神社舊境內除地ノ一部ナリシヲ認ムルニ足ル被告ハ前記各證ハ何レモ明治年代ノ成立ナルニ依リ原告神社舊境內カ古來除地ナリシヤ否ヤ明瞭ナラスト云フモ新甲第八號證並同第十號證ニ依ルモ明カナルカ如クト地處分ノ際ニ於テモ原告神社舊境內ヲ以テ除地ナリト認メ係争地外タル門前町等ノ收納高ニ對シ遞減祿ヲ給與セラレタル事實アルニ依レハ前記各證ハ古來ノ事實ヲ記載シタルモノニシテ原告神社舊境內ハ古來除地ナリシモノト認ムルヲ相當トス而シテ境內除地トハ社寺境內ハ其貢租ヲ免除セラレタルモノニシテ反對ハ證據ナキ限リ該社寺ハ所有ト認ムヘキモノナルハ當裁判所多數ノ判決ニ說明スルカ如クナルヲ以テ此ハ點ヨリスルモ係争地カ古來原告神社ノ私有タル事實ヲ認メサルヲ得ス以上說明スルカ如ク係争地ハ當初素地ノ儘下付セラレタルヲ原告神社ニ於テ私費若クハ寄附ニ依リ之ヲ埋立修築シ料金ヲ徴シ之ヲ貸與セシノ事實アルノミナラス古來除地トシテ其貢租ヲ免除セラレタルモノナル以上ハ之ヲ原告神社私有ナリト斷定セサルヲ得ス依テ主文ノ如ク判決ス

●村會議員選舉效力ニ關スル裁決取消ノ訴 明治四十四年第三號 明治四十四年四月八日判決 (請求不立)

判決要旨

一、町村制第十八條第二項ニヨリ選舉前十日ヲ限リ選舉名簿ヲ

確定名簿トナスハ異議ノ申立ニヨリ之レニ修正ヲ加フル場合ノミナラス然ラサル場合ト雖モ亦タ此規定ニヨリ名簿ヲ確定シ其後ニ於テハ絕對ニ之レカ修正ヲ許サル、モノトス

(參照) 選舉人名簿ハ七日間町村役場ニ於テ之ヲ關係者ノ經覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ町村長ニ申出ツ可シ町村長ハ町村會ノ裁決(第三十七條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選舉前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿トナシ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選舉ニ關スルコトヲ得ス(制第十八條第二項)

原 告 茨城縣新治郡東村長 塚原由助 訴訟代理人 田島熊太
被 告 茨城縣參事會 茨城縣知事 坂 仲 輔 訴訟代理人 久米信之
從 參 加 人 茨城縣新治郡東村大字 中四十八番地平民農 横田文太郎 外四名 訴訟代理人 宮古啓三郎

原告ノ請求相立タス

理由

本訴ノ争點ハ第一選舉人名簿縦覽期日ハ明治四十三年四月六日乃至同月十二日ナリシヤ將タ同年同

選舉名簿ノ確定

月四日乃至同月十日ナリシヤ第二町村制第十八條第二項ニ依リ選舉前十日ヲ限テ確定名簿トナスハ選舉人名簿ヲ修正スヘキ場合ニ限リ其他ノ場合ニハ選舉前十日ヲ限ルノ規定ヲ適用スヘキモノニ非サルヤ否ニ在リ依テ審按スルニ第一乙第三號證原告ヨリ新治郡長ニ對スル四月五日附報告書ニ依レハ「六日ヨリ十二日迄縦覽セシメ云云」ト明記シアルヲ以テ選舉人名簿縦覽期間ハ明治四十三年四月六日乃至同月十二日ナリシモノト認ム原告ハ甲第一號證ノ一乃至五ヲ提出シ縦覽期間ハ四月四日ヨリ同月十日マテト告示シタルノ事實ヲ證セントスルモ此ノ類ノ證明書ハ隨時作成シ得ヘキモノナレハ信ヲ措クニ足ラス第二町村制第十八條第二項ハ選舉前十日ヲ限リテ確定名簿トナスヘキコトト右期限以後ハ名簿ヲ修正スヘカラサルコトヲ併セテ規定シタルモノニシテ修正ノ有無ニ拘ハラズ選舉前十日ヲ限リ確定名簿トナスヘキノ法意ナリト解スルヲ相當トス然ラハ本件選舉ハ同條ニ違反シ名簿確定後十日ノ期間ヲ滅縮シテ行フタルモノニシテ選舉全體ニ影響ヲ及ホスヘキ瑕瑾アルヲ以テ被告カ新治郡參事會ノ裁決ヲ取消シ併セテ選舉取消シタルハ不當ナリト謂フヲ得ス依テ主文ノ如ク判決ス

●戸數割不當賦課徴收取消請求ノ訴

明治四十四年第十號
明治四十四年四月八日判決 (棄却)

判決要旨

一、多數ノ人員共同シテ訴願センニハ訴願法第七條第一項ノ規定ニ從フヲ要ス

一、五人ノ者共同シテ訴願スルトキハ右第七條ノ所得多數ノ人員共同シテ訴願スルモノニ該當ス

(參照) 多數ノ人員共同シテ訴願メントスルトキハ其訴願ニ各訴願人ノ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ(訴願法第七條第一項)

原 告 廣島縣深安郡福山町
本多敬一郎
外四名

被 告 廣島縣參事會
廣島縣知事
宗 像 政

訴訟代理人 田中自治雄

主 文

本訴ハ之ヲ棄却ス

理 由

按スルニ訴願法第七條ニ多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ云々三名以下ノ總代人ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシトアルニ依テ見レハ本件ノ如ク原告等五名共同シテ訴願シタルハ即チ多數ノ人員共同シテ訴願シタルモノト認ム既ニ多數ノ人員トスレハ三名以下ノ總代ヲ選ビ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘキ管ナルニ原告カ之等ノ手續ヲ爲サザリシハ適法ノ手續ニ違背シタルモノニシテ單ニ訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノト云フヲ得ス然ラハ本訴ハ適法ノ手續ニ違反セルモノトス依リテ主文ノ如ク判決ス

多數人員ノ行政訴訟

●縣參事會ノ決定取消ノ訴

明治四十四年四月二十五日判決

(請求不立)

判決要旨

一、戸數割ハ戸ヲ以テ課税ノ目的トナスカ故ニ戸ヲ構ヘサル者ニハ之ヲ課スルコトヲ許サス
一時他ニ旅行シタル者ノ留守居ヲ爲ス者ノ如キハ一戸ヲ構ユル者ト云フヲ得ス從テ之ニ戸數割ヲ賦課スルハ違法也

原告 巖手縣東磐井郡千厩町長
高橋之善

被告 巖手縣參事會
巖手縣知事
笠井信一

主文

原告ノ請求相立タス

理由

甲第六號證(昆野よしの)ニ依レハ佐藤綾吉ト昆野よしのトハ爨炊ヲ共ニシテ費用ヲ分擔シ經濟ヲ異ニシタルモノト認ムヘキモ同證及丙第二號證(村上權之助)ニ依レハ綾吉ハ妻子ト共ニよしの方ニ寄寓

●官有地引戻請求ノ訴

明治三十八年第四百二號
明治四十四年四月二十二日第二部宣告

(請求不立)

判決要旨

一起訴者カ出訴期間經過後訴ノ目的タル土地ノ筆數ヲ追加シタリトスルモ其ノ土地カ當初ノ下戻申請中ニ包含セラレタルモノニシテ訴ノ際脱漏シタルモノニ過キサルトキハ該追加ヲ目シテ不法ナリト云フヲ得ス

留守居者ニ對スル戸數割ノ賦課○出訴期間經過後ニ於ケル追加請求ノ效力

原告 福島縣石城郡川前村
大字下桶賣

右代表者 同村長 若松美三 訴訟代理人 齋藤正毅 外二名

被告 農商務大臣男爵 大浦兼武 訴訟代理人 矢部廉

主文

原告ノ請求相立タス

理由

原告カ本訴提起ノ後ニ至リテ追加請求シタル十筆ノ土地ハ當初下戻申請ノ際該申請中ニ包含セラレ在リタルコトハ被告ノ争ハサル所ニシテ原告ノ本訴一定ノ申立ノ目的ハ被告ノ指令林第一二六一號ニ依リ爲シタル處分ヲ取消スニ在ルヲ以テ該追加請求ハ右一定ノ申立中ニ包含スルモノト認ムルヲ得ルニ依リ之ニ關スル被告ノ抗辯ハ採用セス原告ハ係争地ハ原告部落カ古來其ノ所有者ノ退轉滅亡ニ依リ其ノ租稅ヲ辨納シ來リタルモノニシテ該事實ニ依リ當然原告部落ノ所有ニ歸シタルモノナリト主張スルモ甲第一號證ハ單ニ文政十一年ノ取調ヲ示スモノタルニ過キス甲第三條證ハ村辨納云云ノ記載アル願書タルニ過キス甲第四號證モ亦割賦取立帳ニシテ下桶賣村ノ内高部ニ於テ退轉人未納金ヲ割賦シ取立タル事實アルヲ證スルニ過キス何レモ係争地ニ關シテ租稅ヲ辨納シ又ハ退轉人アリタルコトヲ證スルニ足ラサルニ依リ原告ノ主張ハ理由ナシ原告ハ又甲第五號證地價帳記載ノ反

別ト甲第六號證證明書記載ノ反別トヲ合算シ之ヲ甲第二號證ノ一乃至七水帳記載ノ總反別ヨリ控除スルトキハ其ノ殘反別ハ九十四町九反ニシテ係争地ノ總反別九十六町二反五畝二步ヲ以テ之ニ比スレハ僅ニ一町三反五畝二步ノ過剩ヲ生スルニ過キスシテ大體ニ於テ略相符合スルカ故ニ係争地ハ水帳記載ノ土地ニ該當スルト主張スルモ原告部落ノ疆界内ニハ水帳記載ノ土地以外ニ何等ノ土地存在セザルコトヲ立證セサル以上斯クノ如キ主張ハ固ヨリ之ヲ採用スルヲ得ス甲第七號ハ明治五年ノ下桶賣村ノ高ト反別トヲ示スノミニシテ是亦何等原告ノ主張ヲ支持スルニ足ルモノニアラス之ヲ要スルニ原告ノ請求ハ其理由ナキニ依リ主文ノ如ク判決ス

●町會議員無効選舉取消請求ノ訴 明治四十四年四月八日第二八號 明治四十四年五月四日第二部宣告 (請求不立)

判決要旨

一、投票カ其紙質、墨汁浸潤ノ程度及ヒ折疊ノ方法ニ依リ外部ヨリ被選舉人ノ氏名ヲ透見スルヲ得ス又天地兩端ヨリ特殊ノ手段ヲ用ヒタルトキニ限り僅ニ之ヲ窺知シ得ル場合ノ如キハ町村制第二十二條第一項ニ所謂封緘ヲ具備セサルモノト云フヲ得ス

原告 大分縣大野郡三重町 告 平山登美男 訴訟代理人 上原鹿造 外二名

被告 大分縣參事會 大分縣知事 告 千葉貞幹 訴訟代理人 田島七郎 外一名

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

本件選舉ノ投票中封筒ヲ用キサリシモノハ選舉ノ當時無効ト爲シタルモノナルヲ除ク外紙質墨汁浸潤ノ程度及折疊ノ方法ヨリ觀ルニ何レモ外部ヨリ被選舉人ノ姓名ヲ透見スルコトヲ得サルノミナラス天地兩端ヨリモ特殊ノ手段ヲ用ユレハ僅ニ之ヲ窺知スルコトヲ得ルニ止マリ選舉ノ秘密ヲ保ツニ妨ナキモノト認ムヘキカ故ニ是等ノ投票ハ町村制第二十二條第一項ニ所謂封緘ヲ具備セサルモノト謂フコトヲ得ス從テ本件選舉ハ定規ニ違背スル所ナク原告ノ請求ハ理由ナシ依テ主文ノ如ク判決ス

● 祿高復舊請願ニ對スル不當指令取消請求ノ訴 明治四十二年第二百五十六號 (請求不立) 明治四十四年六月十九日判決

判 決 要 旨

一、高知藩ニ於テ明治二年ノ藩制改革ニヨリ從來陪臣タリシ士格ヲ直臣ニ變更シ藩主ヨリ一定ノ祿ヲ受ケタル者ハ之レト同時ニ舊主ニ對スル祿高ハ消滅シタルモノトス從テ明治九年ノ公債處分ハ其ノ改祿セラレタル高ヲ標準トスヘク曩キニ陪臣タリシ祿高ヲ標準トスヘキモノニアラス

一、明治四年三月陪臣ニ對スル高知藩ノ布達ハ明治二年ノ改革ニ士格ノ變更ヲ受ケス依然陪臣タリシ者ニ對シテノミ適用スル趣旨ニシテ當年已ニ士格ノ變更ヲ受ケタル者ニハ之ヲ適用スルヲ得ス

一、明治二年十二月二日太政官布告ハ舊幕臣ニシテ朝臣トナリタル者ニノミ適用スヘク又々明治五年正月二十九日太政官

明治二年高知藩ニ於ケル陪臣士格ノ變更ハ其ノ效果

布告ハ其ノ當時現ニ卒族タル者ニノミ適用スヘク當時已ニ
民籍ニ在ル者ニ適用スルモノニアラス

(參照) 明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家祿賞典祿ヲ有シタル者及其家名、承繼人ニシテ明治九年八月大政
官第八號布告及同年十二月太政官第五十二號布告施行ノ際其祿高ニ對スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若ハ相當額ノ給
與ニ不足アル者明治四年七月二十四日祿高ニ關スル太政官布告ニ依リ調査シタル以後ノ祿高及其ノ調査以前ニ係ル藩制
施行以後ノ祿高ニ錯誤アルトキハ本法施行ノ日ニ於テ其ノ本人又ハ其ノ家名承繼人ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治九年八
月太政官第八號布告第一條及同年十二月太政官第五十二號布告ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高整理ノ爲發行ス
ル公債證書ヲ以テ給與ス但シ常事犯ノ爲沒祿若ハ減祿セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス(家祿賞與祿處
分法第一條)
(參照) 各府縣實屬卒ノ内從前番代ノ節抱替等ノ稱ヲ以テ其俸等へ祿高ヲ給與シ自然世襲ノ姿ニ相成居候分ハ今士族
ニ可被仰付候條證書ヲ以テ大藏省へ可伺出尤家祿ノ儀ハ從前ノ通可相心得事(明治五年太政官
布告第二十九號)

原 告 高知縣高知市帶屋町
前 田 重 延

被 告 大藏大臣公署
桂 太 郎 訴訟代理人 芹澤孝太郎

主 文

原告ノ請求相立タス。訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

事 實

原告請求ノ要旨ハ原告ハ元高知藩ノ中老職松下登ノ家臣ニシテ三人扶持ニ切米五石合計十石五斗
ノ世襲祿ヲ有シタル者ニシテ明治二年藩政改革ノ際同藩ノ直支配トナリ格式詮議中ト云フ理由ノ

下ニ當分扶助トシテ一人扶持ヲ給與セラレ爾來何等ノ處分ナク荏苒日月ヲ經過スル間ニ於テ原告
ト同様ナル家老及中老職ノ家臣ニシテ舊祿全部ヲ家祿ト定メラレ士族或ハ卒族トナリタル者多カ
リシニ拘ラス原告等ハ依然其ノ儘据置カレタルヲ以テ偏倚ノ處置ナリト感セサルニハアラサリシ
モ譜代恩顧ノ厚キ思召ニ由ルモノナラント信シタリ然ルニ同年十一月士族ノ等級ヲ定メタル際ニ
於テモ尙族祿未定ニ据置カレ翌三年三月兵隊ニ編入セラレ入隊中五等士族方ノ支配ニ移サレ同年
十二月士族ノ等級ヲ廢シ尋テ士ノ常職ヲ解カレタル時ニ當リ原告等格式詮議中ノ者ハ非役者ニ限
リ民籍ニ編入セラレタリ四年三月ニ至リ原告ト同資格以上ノ者ハ概ネ舊主ヨリ給與セラレタル祿
高ヲ以テ家祿ト定メラレタルニ拘ハラヌ原告ハ尙族祿未定ノ儘ニテ勤務シタルニ何ソ圖ラン同年
九月十八日當分扶助トシテ給與セラレタル一人扶持ヲ家産一石九斗ニ引直シ民籍ニ編入セラレタ
リ是レ即チ舊藩最後ノ制度ニ依ラサル不法ノ處分ニシテ藩吏ノ錯誤又ハ故意ニ出ツルモノナリ故
ニ原告ハ明治四年三月舊藩最後ノ制度ニ依リテ舊祿ヲ受ケタル者ト同様ニ舊祿十石五斗ヲ受クヘ
キ者ナルニ拘ラス被告カ祿高復舊ノ請願ヲ採用セサルハ不當ナルヲ以テ其ノ指令ヲ取消シ既得一
石九斗ニ對スル不足額ヲ下付スルノ判決ヲ請フト云フニ在リテ立證トシテ甲第一號證及第二號證
ヲ提出セリ

被告答辯ノ要旨ハ原告請求ノ不當ナルヲ原告ノ主張スル事實ニ依リ既ニ明白ナリ蓋シ舊藩ニ於テ
藩主ニ陪從ノ者ハ明治二年十二月祿制革新ノ際多ク舊主ノ情願ニ依リ藩ノ直支配ニ移サレタリト
雖之ニ對スル給祿其ノ他ノ處置ハ固ヨリ藩ノ隨意ニシテ其ノ舊主ヨリ受ケタル家祿ノ如キハ其ノ

明治二年高知藩ニ於ケル陪臣士格ノ變更及ヒ其ノ效果

舊主ニ對スル身分關係ト共ニ一旦全ク消滅シタルモノナリ其ノ後ニ至リ更ニ族祿ノ給與ヲ受ケタル者ハ專ラ藩政適宜ノ處分ニ因リテ新ニ之ヲ取得シタルモノナルコト當時ノ制度上明白ノ事理ナリ故ニ原告カ明治二年祿制改革以後尙家祿トシテ十石五斗ヲ享有シタリトノ主張ハ到底之ヲ認ムル能ハス從テ原告ハ明治三十年法律第五十號第一條ニ所謂「明治三年九月十日太政官布告藩政施行以後祿賞典祿ヲ有シタル者」トアルニ該當セスト云フニ在リ

理由

按スルニ高知藩ニ於テハ明治二年三月二十日藩政大改革ノ令ヲ發シ家老以下士卒ノ祿高ヲ削減改定シ同時ニ其陪臣ハ「此度大改革申付候ニ付家老共是迄致扶持候家來定メノ外士格ヲ直臣ニ申付其ノ以下願出者同斷」云云ノ藩達ニ依リ一定ノ人員ノミ尙陪臣トシテ殘留シ其ノ他ノ者ハ士格ノ者及出願許可セラレタル者ノミ藩ノ直支配ニ移サレタリ而シテ藩ノ直支配ニ移サレタル者ニ對シテハ格式詮議中ト稱シ當分扶助トシテ一人扶持ヲ給與シタリシカ後其ノ一人扶持ヲ以テ家祿ト定メ民籍ニ編入シテ其ノ處分ヲ結了シタリ原告ハ所謂格式詮議中ニ於テモ尙從前ノ身分ヲ保有シタルモノト爲スカ如シト雖格式詮議中ト稱スルハ藩政大改革ノ際直ニ處分判決シ難キ事情アリタルニ因ルモノニシテ舊主ニ對スル族祿等ノ身分關係ハ藩ノ直支配ニ移サレタリト同時ニ當然消滅スヘキモノナルコトハ言フ俟タス從テ該改革以後原告ノ有シタル家祿ハ明治四年九月ニ決定セラレタル一人扶持ニシテ之ニ對シテハ相當ノ處分ヲ受ケ金祿公債證書ヲ受領シタルコトハ訴訟ノ目的中ニ既得金額ヲ記載セルニ依ルモ明白ナリ故ニ原告ハ明治三十年法律第五十號第一條ニ所謂

「其祿高ニ對スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若クハ相當額ノ給與ニ不足アル者」ニ該當セス然ルニ原告ハ明治四年三月「舊一等士族以下譜代家來士族御扱ノ者舊主家ニシテ取來ノ祿ヲ以家産ニ取結士族籍ニ被差入三分一削祿ハ式書規則ノ通且前削祿之節主家ニ於テ人減之故ヲ以テ加増致分差除舊祿相認メ差出可申事」云云ノ藩達ニ依リ處分セラレタル者ヲ引證シテ同一處分ヲ受クヘキモノナリト主張スレトモ該達ハ當時尙陪臣タル身分ヲ繼續保有シタル者ニノミ適用スヘキ規定ニシテ原告ノ如キ既ニ藩ノ直支配ニ移サレタル者ニ適用スヘキモノニ非ス蓋シ該達ニハ後段ニ於テ「若黨其家産三石七斗被下置平民籍ニ被差入」及「小者ハ二石七斗終身家産トシテ被下置」等ノ規定アリテ士族以下小者ニ至ル迄適用ヲ受クヘキモノナリ藩政改革經費節減ノ際ニ於テ明治二年以來既ニ其ノ處分ヲ結了シタル多數ノ陪臣ニ對シ更ニ家祿ヲ復舊シテ士族籍ニ編入シ又ハ高祿ヲ給與シテ民籍ニ編入スルカ如キハ到底想像スル能ハサル所ニシテ要スルニ該達ハ將來陪臣ヲ廢スル爲當時現存シタル陪臣ノ處分ヲ規定シタルモノナルコトハ推測スルニ難カラス又原告ノ引用シテ其ノ適用ヲ受クヘキモノナリト主張スル甲第一號證明治二年十二月二日太政官布告ハ舊幕臣ニシテ朝臣トナリタル者ニノミ適用スヘク甲第二號證明治五年正月二十九日太政官布告ハ其ノ當時現ニ卒族タル者ニノミ適用スヘキ規定ナルコトハ解釋上明白ナルヲ以テ何レモ原告ハ之カ適用ヲ受クヘキモノニ非ス以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

●祿高更正請願ニ係ル指令不服ノ訴

明治四十二年第四百三十一號 明治四十四年六月廿六日判決

(請求不立)

祿高割付徴收ト減祿トノ區別

判決要旨

一、明治五年布告第二百二十六號ハ藩債又ハ公廨費ニ充ル爲メ當時藩内各士族ノ享有スル家祿ニ割付ケ徵收セラレツ、アリシモノヲ免除スルノ趣旨ニシテ假令藩債又ハ公廨費ニ充ル爲メ減祿セラレタリトスルモ其ノ減祿セラレタルモノヲ以テ一般ニ其ノ者ノ家祿ト定メタルモノニ對シテハ同布告ヲ適用スルヲ得ス

(參照) 舊藩債ノ義ハ一藩ノ石高ニ關スル事ニ付支消年限目途相立藩知事並士族卒家祿ノ内ヘモ分賦償却可致旨庚午九月中相違置候處今般實債ノ儀ハ悉ク大藏省ヘ引受處分可致且公廨費ノ儀モ一定ノ規則相立候ニ付テハ負債支消或ハ公廨費等ノ内ヘ是迄家祿ヲ以差出來り候分自今總テ差免候事(明治五年第百二十六號布告)

原告 兵庫縣保部林田村 長野重吉 訴訟代理人 北條直正
被告 大藏大臣公爵 桂太郎 訴訟代理人 小島誠

原告ノ請求相立タス

理由

舊林田藩ニ於テハ明治二年十一月士卒ノ俸祿ヲ定メ明治三年十一月更ニ其俸祿ヲ改正シ原告等ハ右改正高ニ依リ家祿奉還處分又ハ金祿公債處分ヲ受タルコトハ原被問争ヒナキ事實ニシテ原告ハ右明治三年十一月ノ改正祿高ハ藩債償却ノ爲メ明治二年十一月ノ祿高ヨリ減祿セラレタルニ付右減差額ハ明治五年第百二十六號布告ニ依リ差出方ヲ免セラレタルヲ以テ明治二年十一月ノ祿高ニ復舊シ不足額ヲ支給セラルヘキモノナリト主張スルトモ明治五年第百二十六號布告ニハ「前略負債支消或ハ公廨費等ノ内ヘ是迄家祿ヲ以テ差出來候分自今總テ差免候事」トアリテ本布告ハ布告發布ノ當時現ニ各自ノ享有スル家祿ニ對シ割付ケ徵收シツツアリタル石高ヲ免除スルノ趣旨ニシテ本訴ノ如キ既ニ祿制ニ依リ一定ノ祿高ヲ定メタルモノハ其目的譬令藩債償却ノ爲メナリトスルモ右減差額ハ本布告ニ所謂家祿ヲ以テ差出來候分トアルニ當ラサルヲ以テ原告ノ主張ハ採用スルヲ得ス其他原告ニ於テ種種陳辯スル所アルモ事枝葉ニ涉リ裁判上必要ナキモノト認め一々説明ヲ爲サス

不當裁決消ノ訴

明治四十二年第百四十七號 明治四十四年六月二十七日判決

(請求不立)

判決要旨

一、助役ノ退隱料ハ退職ノ事實アルニアラサレハ之ヲ請求スル

任期満了ノ場合ニ於ケル助役ノ留任ト退隱料ノ給與

コトヲ得ス

一、助役カ任期滿了ノ時引續キ留任シタキ旨ヲ村長ニ乞フトキハ其ノ裁可カ數日ノ後ニアリトスルモ就任ノ效果ハ任期滿了ノ當日ヨリ發生スヘキチ一般ノ例規ナリト云フモ法規ニ明文ナキ限り法理ノ分析トシテハ右助役ハ任期滿了ノ時ニ一旦退職シ更ラニ數日ヲ經テ再ヒ助役ニ就任シタルモノト云ハサルヲ得ス從テ村長カ右助役ニ對シ任期滿了ノ當日ヲ以テ退隱料給付ノ證書ヲ交附シタルハ違法ニアラス

佐賀縣東松浦郡呼子村會議長
同村村長

原告 伊藤受治郎 訴訟代理人 元田 肇

被告 西村陸

佐賀縣知事

訴訟代理人 島田三郎

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

原告ハ助役任期中ニ引續キ留任ノ認可ヲ乞フトキハ其裁可ハ數日後ニアリトスルモ就任ノ效果ハ任期滿了當日ヨリ發生スヘキチ一般ノ例規ナリト云フモ法規ニ明文ナキ限一旦任期滿了シ數日ヲ經テ再ヒ助役ニ就職シタルモノハ前後引續キ在職セシモノト云フヲ得ス從テ舊呼子村長カ舊呼子村助役大木房次郎ニ對シ退隱料給付ノ證書ヲ交付シタルハ正當ナリ原告ハ助役認可ノ申請中ニ退隱料給付ノ辭令ヲ與フル謂ハレナキト四十二年九月ニ現金ノ支拂ナカリシトノ理由ヲ以テ該辭令書ハ明治四十二年二月二十三日大木房次郎カ依願退職スルニ至リ始メテ交付シタルモノナルカ故ニ違法ナリト云フモ前段説明ノ如ク任期滿了シ退職ノ事實アル上ハ假令認可申請中ト雖退隱料給付ノ辭令書ヲ交付スヘカラサルノ理ナク又現金ノ支拂ヲ請求スルトセサルトハ退隱料ノ給付ヲ受クル者ノ自由ナルカ故ニ偶々四十二年九月分ノ支拂ヲ請求セサルハ一事ヲ以テ該辭令書ハ日附當時ニ交付ナキモノト斷定スルヲ得ス然ハ則チ被告ノ裁決ハ相當ニシテ原告ノ請求ハ理由ナシ依テ主文ノ如ク判決ス

●國有林土地森林下戻請求事件

明治三十八年第二百七十三號
明治四十四年六月五日第一號宣告 (請求不立)

判 決 要 旨

一、舊仙臺藩ニ於ケル拜領山ハ單ニ拜領ノ事實ノミニテハ未タ以テ所有權ヲ認ムルニ足ラス

舊仙臺藩ニ於ケル拜領山ノ所屬

原告 北海道膽振郡幌別村 片倉健吉 訴訟代理人 齋藤忠二 農商務大臣男爵 大浦兼武 訴訟代理人 岸清一

原告ノ請求相立タス

理由

按スルニ係争地ハ原告ノ祖先カ伊達家ヨリ拜領シタルモノナルコトハ原被ノ間ニ争ナシ舊仙臺藩ニ於ケル拜領山ハ單ニ拜領ノ事實ノミヲ以テ所有權ヲ認ムルニ足ラストスルコト當裁判所ノ判例ニ於テ漸次説明スル所ハ如シ原告ハ係争ノ拜領山ハ同藩普通ノ拜領山ト性質ヲ異ニスト稱スルモ其性質ノ異ルコトヲ徵スヘキ立證ヲ見ス甲第二號證ニハ「山林竹木等自用異他家也」トノ記載アリ甲第四號證ノ二ニハ「此方ノ格式トハ格別ノ義ニ御座候」トノ文字アルヲ以テ見レハ何等カ他家ニ異ルノ特典ヲ有シタルコトハ察知シ難キニアラサルモ未タ之ヲ以テ所有權ヲ有シタルコトヲ推定シ得ルノ限ニアラス又原告ハ甲第四號證ヲ以テ所領地内ノ山林原野ハ高外ナルコトヲ知ルニ足ルト言フモ同證ニハ毫モ高外ナルコトヲ知ルニ足ルヘキ記載ナク又原告ハ甲第五號證及甲第六號證ヲ以テ係争地ノ一部ニ殖林ヲナシ若クハ殖林ノ獻納ヲ受ケタルコトヲ主張スルモ同證ニ依レハ只々藏本村及ヒ愛宕山外數ヶ所ニ造林ヲナシ又ハ藏本村外一個所ノ林木ノ獻上ヲ受ケタル旨ノ記事アルニ過キス然ルニ大字藏本愛宕山ニ係ル請求ハ原告ノ取下ケタル所ニシテ其他モ亦係争地

ノ舊名ニ符合スルモノナキヲ以テ此等ノ事蹟ハ係争地ニ關係ナシト看ルノ外ナシ原告カ同證中ノ記事ヲ援用シ自由處分ヲナシタリト言フモ亦タ其場所ノ係争地ニ同シキコトヲ知ルニ由ナシ又原告ハ甲第八號證ニ係争地ノ記載ナキハ私有地ナルカ爲メナリト言フモ同證ハ拜領地ノ全部ヲ掲載シタルモノナルヤ否ヤ私有地ハ之ヲ除クノ趣意ナリシヤ否ヤ不明ナルヲ以テ其登載ノ有無ハ所有ヲ斷スルノ證トナラス其他原告ハ仙臺藩制ニ於テ一般ノ拜領山ト係争ノ如キ拜領山トノ間ニ公領ト私有トノ區別ヲ設ケタルコトヲ説クモ結局見ルヘキ根據ナシ尙ホ甲第一號證ハ當裁判所ノ命シタル鑑定人多數ノ意見ヲ相當トシ其成立真正ナラスト認め之ヲ採ラス即チ原告ノ主張ハ總ヘテ理由ナキヲ以テ主文ノ如ク判決ス

●金銅鑛試掘不當許可取消請求事件

明治四十三年第二百七十九號 明治四十四年六月二十六日判決 (請求不立)

判決要旨

一、郵便物受付ニ關スル已定ノ時刻外ニ受付ケタル郵便物ハ受付時刻ニ至ラサレハ鑛業法第三十三條ノ所謂發送ノ效力ヲ生セス

一、郵便物受付時刻カ午前六時ヨリ午後十時限リナル場合ニ於テハ午前零時ニ受付タル郵便物モ午前六時ニ受付ケタル郵便物モ

引受時刻外ニ引受タル郵便物ノ發送○鑛業法第三十三條ノ適用

便物モ其ノ發送ノ日時ハ共ニ同一ナルモノトス而シテ其ノ
郵便物カ共ニ試掘出願ノ書類ナルトキハ鑛山監督署長ハ鑛
業法第三十三條第一項ノ規定ニヨリ處分スヘキモノトス

(參照) 郵便電信局郵便電信局ニ於テ郵便又ハ電報受付時限左ノ通改定スル但別配達郵便物受付及時間ヲ定メテ通信
取扱ヲ爲ス局ノ電報受付ハ此ノ限ニ在ラス一、毎年三月一日ヨリ十月三十一日マテ午前六時ヨリ午後十時マテ一、
毎年十一月一日ヨリ翌年二月末日マテ午前七時ヨリ午後十時マテ(明治二十二年遞信省) 告示第二百十四號
郵便局所内ニ於テ郵便物ノ引受ヲ爲スハ郵便取扱時間中ニ限ル但シ別配達郵便物及特ニ定メタルモノハ此限ニ在ラス
(郵便規則第七十條)

試掘出願地又ハ探掘出願地重複スルトキハ其ノ重複スル部分ニ付テハ願書發送ノ日時ノ先ナル者優先權ヲ有ス願書發送
ノ日時同一ナルトキハ鑛山監督署長ハ之ヲ各出願人ニ通知スヘシ此ノ場合ニ於テハ出願人ハ其ノ通知書發送ノ日ヨリ六
十日以内ニ協議ヲ調ヘ之ヲ届出ヘシ(鑛業法第三十
三條第一項)

秋田縣平鹿郡旭村
原告 告 鈴木 豊 治 訴訟代理人 中山 兵 吉
仙臺鑛山監督署長
被告 告 福山 龜 太郎 訴訟代理人 矢 部 廉
岩手縣和賀郡岩崎村
從參加人 株式會社仙人製鐵所
取締役
右法定代理人 兩 宮 亘 訴訟代理人 (岡崎 正也
菊地 儉 輔)

原告ノ請求相立タス。訴訟費用ハ原告ノ負擔トス
主 文
事 實

原告事實上供述ノ要領ハ原告ハ原告ノ外七名ノ者ト共ニ巖手縣陸中國和賀郡湯田村地内字大石澤
山ノ内小字目當山官有地山林同大見澤民有地山林此稱數六十六萬三千〇二十坪ニ對シ金銅鑛試掘
出願ヲ爲シ明治四十一年四月十三日其許可ノ登錄ヲ受ケタル所右試掘權ハ明治四十三年四月十三
日二個年ノ期間滿了スルニ至ルヲ以テ原告ノ外高橋丑五郎小林源吉ノ兩名ヲ代表シ該鑛區ニ對シ
更ニ試掘出願ヲ爲シ其願書ハ明治四十三年四月十四日午前零時一分横手下タ町郵便局引受第五百
十八號ノ書留ヲ以テ被告ニ郵送シタリ然ルニ被告ハ其後ノ出願ニ係ル株式會社仙人製鐵所ニ對シ
該鑛區ノ出願ヲ許可シ原告ニ對シテハ鑛區重複スルトノ理由ヲ以テ不許可ノ處分ヲ爲シタリ此處
分ハ違法ナルニ付茲ニ出訴シタル次第ナリ依テ被告カ巖手縣試掘權登錄第六百九十號金銅鑛區ニ
對シ株式會社仙人製鐵所ニ與ヘタル試掘許可ハ之ヲ取消シ更ニ該鑛區ノ試掘權ヲ原告ニ許可スヘ
シ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云フニアリテ立證トシテ甲第一號乃至第五號證ヲ
提出セリ

被告事實上供述ノ要領ハ原告ハ高橋丑五郎外一名ト共同シ明治四十三年四月十四日附ヲ以テ係爭
ノ金銅鑛試掘出願ヲ爲シタルニ該出願ハ同日午前六時提出シタル訴外株式會社仙人製鐵所ノ金銅
鑛試掘出願地及同日午前六時提出シタル訴外高橋榮次郎金銅鑛試掘出願地ト全部重複シタリ依テ

引受時刻外ニ引受タル郵便物ノ發送ノ鑛業法第三十三條ノ適用

原告ノ願書發送日時ヲ調査シタルニ其封皮ニ押用シタル郵便日附印ニハ四十二年四月十四日前5-8トアリ又横手下タ町局ニ於テ封皮ニ證明シタル引受時刻ハ四十二年四月十四日午前六時一分受付ト記載シアルニ拘ハラズ原告ヨリ提出シタル郵便物受取證ニハ引受時刻零時一分ト記載シアリテ兩者相一致セス之レ横手下タ町局ニ於テ誤テ午前零時一分ニ原告ノ郵便物ヲ受領シ検査ヲ了シタルモ其後郵便規則第七十條及明治二十二年遞信省告示第二百十四號ニ違背シ引受時間開始前ニ受付ケタルコトヲ覺リ引受時間開始後ノ最先時刻午前六時一分ヲ引受時刻ト更正シ此時刻ヲ封皮ニ記入シ且ツ其旨原告ヘモ通知シタル後發送ノ手續ヲ爲シタルニ基クモノトス然ルニ引受時間開始後ノ最先時刻ハ午前六時ナルヲ以テ此時刻ヲ引受時刻トスルヲ正當ト認メ更ニ六時引受ノ事ニ更正シ原告ヘモ其旨通知シタルモノニシテ仙臺遞信管理局長モ此處分ヲ適當ト認メタリ然ルニ原告ハ遞信省ニ對シ右更正ヲ不當トシ其取消ヲ請求シタルニ遞信省ニ於テモ右更正ヲ適當ト認メ其申請ヲ却下セリ依テ被告ハ之ニ基キ原告及株式會社仙人製鐵所並ニ高橋榮次郎ノ三出願ヲ認メ鑛業法第三十三條第一項ニ依リ其旨各出願人ニ通知シタルモ各出願人ハ法定期間中ニ何等届出ヲ爲サザリシニ付同條第二項及鑛業法施行細則第三十條ノ規定ニ基キ本年十月二十日正午抽籤ヲ行ヒタル結果株式會社製鐵所カ最優先權者トシテ當籤シタルモノトス故ニ被告ハ仙人製鐵所ノ出願ヲ許可シ原告出願ニ付テハ鑛業法第九條第三項同一ノ鑛區ニ於テ二以上ノ鑛業權ヲ設定スルコトヲ得ナル理由ニ依リ原告ノ出願ニ付テハ不許可ノ處分ヲ爲シタルモノナリ依テ原告ノ請求相立タズ訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云フニアリテ立證トシテ乙第一號證乃至第七號證ヲ提出

出シタリ

被告從參加人陳述ノ要領ハ被告陳述ノ如ク原告及從參加人ノ願書ハ何レモ明治四十三年四月十四日午前六時以前ナルモ原告ノ願書發送ノ時刻ヲ午前六時ト認定シ遞信省ノ告示ニ基キ引受時刻ヲ午前六時ト更正シ抽籤ニ依リ從參加人カ當籤シタルモノナレハ其手續ハ正當ニシテ本訴原告ノ請求ハ理由ナキモノトス依テ原告ノ請求相立タズ訴訟費用ハ原告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云フニ在リ

理由

原告カ係爭鑛區ノ試掘出願ヲ書留郵便ヲ以テ明治四十三年四月十四日午前零時一分横手下タ町郵便局ニ差出シ同時刻ニ同局カ其受付ヲ爲シタルコトハ當事者間ニ爭ナキ所ナリ然レトモ明治二十二年遞信省告示第二百十四號明治三十三年遞信省令第四十二號郵便規則第七十條ニ依リハ別配達郵便物ヲ除キ郵便物ノ受付時間ハ毎年三月一日ヨリ十月三十一日マテハ午前六時ヨリ午後十時ニ限ルカ故ニ横手下タ町郵便局カ此制限外ノ時刻即チ午前零時一分ニ原告差出ノ書留郵便物ヲ受付タルハ錯誤ニシテ鑛業法第三十三條ニ所謂發送ノ效力アリトスルヲ得ス依テ被告カ横手下タ町局ノ該書留郵便物ノ受付ヲ午前六時ト爲シタル更正通知ヲ是認シタルハ正當ナリ然テハ即チ係爭鑛區ニ對シ同十四日午前六時前ニ受付タルモ前示ト同一ノ理由ニヨリ之ヲ午前六時受付ト更正シタル訴外高橋榮次郎及株式會社仙人製鐵所ノ試掘出願ト全部重複シ且其發送日時同一ナリトシ鑛業法第三十三條及鑛業法施行細則第三十條ノ規定ニ從ヒ抽籤ヲ行ヒタル結果當籤者株式會社仙人製

受引時刻外ニ引受タル郵便物ノ發送○鑛業法第三十三條ノ適用

鐵ヲ優先權者トシ鑛業法第九條第三項ニ依リ原告ノ出願ニ對シ不許可ノ處分ヲ爲シタルハ正當ニシテ毫モ違法ノ點アルコトナシ依テ本訴原告ノ請求ハ理由ナシトシ主文ノ如ク判決ス

●縣參事會裁決不服ノ訴 明治四十四年第三十六號 明治四十四年六月二十日判決 (請求不立)

判決要旨

一、村長ト村會議長トハ其ノ職務權限ヲ異ニスヘキモノナレハ村長ノ資格ヲ以テスヘキ訴願ヲ村會議長ノ資格ヲ以テシタルハ單ニ訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マラス訴願法第九條第一項ニ所謂適法ノ手續ニ違背シタルモノニシテ却下ノ處分ヲナスヘク之ヲ提出者ニ還附シテ補正ヲサシムヘキモノニアラス

一、訴願書ノ文字カ誤記ト認メ得ルトキハ之レカ訂正ヲ許スモ然ラサルトキハ之レカ訂正ヲ許サス

(參照) 法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス(訴願法第九條第二項)

原 告 佐賀縣佐賀郡鍋島村長
佐賀縣參事會 佐賀縣知事
被 告 西村典陸夫
訴訟代理人 品川芳英一
桑原一三郎

主 文

原告ノ請求相立タス

理 山

按スルニ原告カ被告ニ提出シタル訴願書ニ村會議長ト明記シアルハミナラス明治四十三年八月十日ノ鍋島村會議事録ニ依レハ本件訴願ヲ被告ニ提出スルニ當リ村會議長ノ議ニ付シタルコト明ナルニ依リ單ニ村長ノ資格ヲ以テ訴願シタル者ニアラスシテ全ク村會議長タル資格ヲ以テ訴願ヲ提出シタルモノト認メサルヲ得ス而シテ此ノ如キ訴願ハ訴願法第九條第一項ニ所謂適法ノ手續ニ違背シタルモノニシテ單ニ訴願書ノ方式ヲ闕クニ止ルモノニアラサルニ依リ被告ニ於テ還付ノ措置ヲナスヘキモノニアラス又原告ハ被告ノ裁決前ニ村會議長ヲ村長ト訂正スル旨ノ申立ヲ爲シタルニ拘ハラス被告カ訴願書中原告ノ肩書ニ議長ト記載アル一事ヲ捉ヘテ之ヲ却下シタルハ不當ナリト云フト雖モ村會議長ノ文字ハ前述ノ如ク誤記ト認メ難キニ依リ後ニ至リ之ヲ訂正シ得ルモノニアラス要スルニ被告ノ裁決ヲ不當ト爲スノ理由ナキニ依リ主文ノ如ク判決ス

村會議長ノ資格ヲ以テスル行政訴訟〇〇〇訂正

●村會議員選舉ニ對スル縣參事會裁決不服事件

明治四十四年第四十三號
明治四十四年六月二十日第二部宣告

判決要旨

一、一戸ヲ構ヘサル者ハ町村制第十五條第一項ニ依リ村會議員ノ被選舉權ナキモノナルヲ以テ其當選ハ之ヲ取消スヘキモノトス

(參照) 選舉權ヲ有スル町村公民(第十二條第一項)ハ總テ被選舉權ヲ有ス(町村制第十(五條第一項))

原 告 山梨縣東山梨郡大藤村
矢崎 定八

被 告 山梨縣參事會
山梨縣知事

訴訟代理人 阪本 國作

主 文

明治四十四年三月十五日附ヲ以テ爲シタル被告ノ裁決及明治四十三年七月二十七日山梨縣東山梨郡大藤村ニ於テ執行シタル村會議員二級選舉會ニ於ケル萩原由太郎ノ當選ハ之ヲ取消ス

理 由

按スルニ乙第一號證ハ萩原由太郎ノ差出シタル別居届ニ過キサレハ直チニ之ハミヲ以テ一戸ヲ構ヘタルモノト認メ難ク而シテ「由太郎ハ父ト共ニ父ノ家ニテ家業ニ從事シ食料ノ如キハ必要ニ應シ本宅ヨリ持來リツツアリ」トノ萩原藤吉申述書ノ記載ニ依レハ萩原由太郎ハ單ニ萩原藤吉方ニ

●營業稅課稅標準決定處分取消請求ノ訴

明治四十四年四月十四日第五號
明治四十四年六月二十一日第三部宣告

(請求不立)

判決要旨

一、牛馬ノ賣買ヲ業トスル者カ住宅ノ一部ニ牛舎及繫留所ヲ有スル以上ハ特定ノ賣買又ハ交換カ其以外ニ於テ行ハレタリトスルモ該場所ヲ以テ營業場ト認定スルモ妨ケナシ

原 告 岡山縣吉備郡新木村
森脇 爲右衛門

被 告 廣島稅務監督局長
菊地 良

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

按スルニ原告カ被告ノ課稅標準決定ヲ違法ナリトスルハ原告カ一定ノ店舗又ハ營業場ヲ有セサル

賣買交換ヲ爲スヘキ營業場

ヲ理由トスルモノナリト雖原告カ牛馬ノ賣買ヲ業トシ之レカ爲メニ二箇ノ牛舎及ヒ數箇ノ繫留所ヲ自己ノ住宅構内ニ有スルコトハ爭ナキ事實ナルカ故ニ被告カ住宅ノ一部ヲ以テ牛馬賣買ノ一定ヲ營業場ト認メタルハ相當ニシテ原告ノ主張ハ理由ナキモノトス原告ハ甲第七號乃至第十八號證ヲ以テ原告ノ住宅ニ於テハ賣買取引ヲ行ハレタルコトヲ立證セントスルモ此等各證ハ其ノ特定ノ賣買又ハ交換カ原告ノ住宅以外ニ於テ行ハレタルコトヲ記スニ止マリ假リニ其ノ記載ハ眞實ナリトスルモノヲ以テ原告ノ住宅ヲ營業場ト認定シタルハ不當違法ナリトノ證トナスヲ得ス其ノ他當事者ニ於テ種種陳辯スル所アルモ本件裁判上必要ナキヲ以テ一一説明ヲ加ヘス
以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

三九

判決要旨

●酒精及酒精含有飲料稅賦課處分取消請求ノ訴
明治四十三年第二百四十九號
明治四十四年六月九日判決(請求不立)

一、酒精製造場内ノ井戸カ減水ニヨリ制限石數ヲ製造シ能ハサ
リシトスルモ直チニ之ヲ以テ天災其ノ他已ムヲ得サル事故
ニ依ル用水ノ不足ト認ムルヲ得ス從テ之レニ酒精及ヒ酒精
含有飲料稅法第五條ノ二第二項ヲ適用シ造石稅ノ免除ヲ求
ムルコトヲ得ス

八四

(參照) 酒精又ハ酒精含有飲料製造ノ免許ヲ受ケタル者前項ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲サザリシトキハ變災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因ルコトヲ證明スルニ非サレハ製限石數ニ相當スル造石稅ヲ課ス但シ其ノ製造セザリシ石數ニ對スル造石稅ハ一石金二十一圓ノ割合ニ依ル(酒精及酒精含有飲料稅法第五條ノ二第二項)

八五

原告 告 東京市日本橋區本石町 訴訟代理人 岡村輝彦
小林平四郎 打田傳吉
被告 告 東京稅務監督局長 訴訟代理人 西脇晋
菅野盛次郎

主文

原告ノ請求相立タス

理由

原告ハ製造用水ハ旱天ノ爲メニ不足シタリト云フモ原告ノ造場内ニ於ケル檢證圖口號井水ハ當裁
判所ノ命シタル鑑定人佐藤壽衛ノ鑑定書ニ「此水ハ酒精製造ニ使用シ得ルモ良好ノモノト認定ス
ルコト能ハス」トアルト又檢證ノ當時ノ水量カ二十石七斗七升五合ナルトニ依レハ此ノ井水ニ依
リ酒精ヲ製造シ得スト認ムルヲ得ス原告ハ假リニ此井水ハ之ヲ仕込ニ使用スルヲ得且仕込ニ用ユ
ル水量ニハ充分ナリトスルモ雜用水ノ使用ニハ非常ニ不足ナリト云フモ乙第一號證ニ依レハ原告
ノ浚渫セシ古井ノ水ハ雜用水ニ使用シ能ハスト認メ得サルノミナラス原告カ製造免許ヲ受ケタル
當時ニ於テハ製造場ニハ尙一箇ノ井存在シタルモノニシテ原告ハ任意ニ之ヲ埋メ其使用ヲ廢止シ
タルモノナレハ假令原告主張ノ如ク當時旱天ニシテ井水ハ一般ニ減水シタリトスルモ原告制限石

用水ノ不足ト造石稅ノ減免

二九

數ヲ製造シ能ハカリシハ直チニ之ヲ天災其ノ他已ムヲ得サル事故ニ依ル用水ノ不足ト認ムルヲ得
ス而シテ此ノ井ヲ埋メタルハ明治四十二年十一月ナルヲ以テ其ノ當時ニ於テ此ノ井水カ果シテ原
告主張ノ如ク雜用水ニモ使用シ能ハサリシコトヲ認ムルニ由ナク甲第八號證ハ斯ノ如キ成分ノ水
カ飲料トシテ適セサルコトヲ證スルニ止マリ之ト同一成分ノ水カ當然酒精製造ニ關シ使用シ能ハ
ストノ證ト爲スニ足ラス

三〇〇

●軍人恩給ニ係ル不當處分取消請求ノ訴

明治四十四年第五十九號
明治四十四年六月九日第一部裁決

(却下)

判決要旨

一、軍人ノ恩給請求ニ關シ恩給局ノ裁決ヲ經タルモノハ軍人恩
給法第四十一條第二項ニ依リ行政訴訟ヲ提起スルヲ得サル
モノトス

(参照) 行政上ノ處分ニ由リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フ
コトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審
確定ノモノトス「一傷疾疾病ノ原因及其輕重」ニ職務ニ堪ユルト否ヲサルト(軍人恩給法第四十一條第二項)

原告 岡山縣久米郡大俵村大字
南方一色七百八十七番地
告 岡田 國治 郎
内閣總理大臣公爵

八六

被告 桂 太郎

主 文

本訴ハ之ヲ却下ス

理 由

原告訴求ノ要旨ハ原告ハ明治三十七年中充員下令ニ應シ入隊シ日露戰役從軍中右膝關節炎ニ罹リ
治癒スルニ至ラス明治三十八年中兵役ヲ免除セラレタルニ依リ恩給ヲ請求セシニ恩給ヲ受クヘキ
權利ナキモノト裁定セラレタルヲ以テ更ニ内閣恩給局ニ具申シ裁決ヲ請ヒタルニ同局ニ於テモ亦
原告ノ申立相立タサル旨裁決セリ然ルニ右裁決ノ基礎ト爲リタル常務顧問醫ノ鑑定ニ於テモ原告
ノ罹リタルカ如キ疾病ハ絶對ニ公務ニ基因シ發スヘキモノニアラストノ鑑定ニアラス隨テ或ル場
合ニ於テハ公務ニ基因シ發シ得ヘキモノナルヲ認ムルモノナレハ若シ原告カ法律ノ規定ニ依リ提
出セシ現認證書即チ別ニ一定ノ様式ナク全ク所屬長官ノ任意ニ依リ作成セラルルヲ以テ其ノ學力
等ノ如何ニ依リ差異アルヘキ現認證書ノ記事不完全ニシテ該書ノミニ依リ原告ノ疾病カ公務ニ基
因セシヤ否ヤ明確ナラストセハ更ニ發病當時ノ事實ニ就キ審査ヲ遂ケ裁決スヘキモノナルニ單ニ
現認證書ノミニ依リ病原ヲ捕捉シ得ストナシ裁決セシハ不當ニシテ原告ノ恩給ニ關スル權利ヲ障
害スルモノナレハ其取消ヲ求ムト云フニ在ルモ軍人恩給法第四十一條第二項但書ニ「左ノ事件ニ
關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス一、傷疾疾病ノ原因及其輕重」トアレハ本件ニ付テ
ハ行政訴訟ヲ提起スルヲ得サルモノナリトス依テ行政裁判法第二十七條ニ依リ主文ノ如ク裁決ス

行政訴訟ヲ許ササル請求

三〇一

八七

●不當裁決取消ノ訴 明治四十四年第二十九號 明治四十四年六月八日判決 (請求不立)

判決要旨

一、登記申請ノ代書又ハ代理人トシテ事ヲ辨スルヲ以テ業トスル者ハ町村制第十五條第四項ニ該當シ町村會議員ニ選舉セラルコトヲ得ス

(參照) 代書人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選舉セラルコトヲ得ス(町村制第十條第四項)

原 告 福島縣相馬郡中村町長 泉田 胤信

被 告 福島縣參事會 福島縣知事

訴 訟 代 理 人 西久保弘道 岸田 儀一

主 文

原告ノ請求相立タス。訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

理 由

原告ハ森仁ハ時ニ依頼アレハ登記代人タルコトアルニ過キスト云ハモ同人カ代書業ト共ニ登記申請ノ代書業ヲ營ムコトハ森仁ナル者ハ登記申請等ニ付他人ノ依頼ヲ受ケ代書ヲ爲シ又ハ代理人ト

●國有原野下戻請求ノ訴 明治三十八年第五十號 明治四十四年五月十六日第二部宣告 (請求相立)

判決要旨

一、檢地ハ租稅ヲ負擔スヘキ私有地ニ對シ行ハレタルモノナルヲ以テ外書檢地帳ニ登録セラレタルモノト雖モ反對ノ證據ナキ限り之ヲ私有地ナリト認ムルヲ當然トス

原 告 福島縣安達郡高川村 大字玉川ノ内 青木 葉部落

同村長 右代表者 河野左門大、 訴訟代理人 宮古啓三郎

被 告 農商務大臣男爵 大浦 兼武 訴訟代理人 岸 清一

主 文

代書人ノ被選擇○檢地ノ性質

被告ハ左記ノ土地ヲ原告ニ下戻スヘシ
福島縣安達郡高川村大字玉川
字上之原六番
一國有柴山三町七反五步。外十三筆

理由

甲第一號證檢地水帳ノ成立正確ナルコト竝ニ係争地カ同證立證ノ土地ニ該當スルコトハ被 毛争
ハサル所ナレハ本件ノ争點ハ係争地カ外書檢地水帳ニ登録セラルルノ事實ニ依リ其私有ナルコト
ヲ認メラルヘキヤ否ヤニアリ依テ按スルニ檢地ハ租稅ヲ負擔スヘキ土地則私有地ニ對シ行フモノ
ト推定スルヲ相當トスレハ外書檢地帳ニ登録セラレタルモノト雖モ反對ノ證據ナキ限り私有ナリ
ト認メサルヲ得ス而シテ係争地ハ甲第一號證檢地水帳ニ於テ村中、村山、村地ト記載セラレ原告
ノ名受ト爲リ居ルカ故ニ原告ニ下戻スヘキモノトス依テ主文ノ如ク判決ス

●村會議員選舉人名簿ニ關スル訴

明治四十四年第三十四號
明治四十四年五月十六日第二部宣告

(請求不立)

判決要旨

一、選舉人名簿調製ノ様式ニ關シテハ法律ニ特別ノ明文ナシト
雖モ町村制第十三條第一項第二項第十九條第二項及ヒ第十

八條第一項ノ各條ヲ綜合推究スレハ選舉人名簿ニハ選舉人
ノ等級ノ區別及ヒ其標準タル納稅額ヲ明示スヘキモノト解
スルヲ相當トス

(參照) 選舉人ハ分テ二級ト爲ス。選舉人中直接町村稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選舉人全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル可キ
者ヲ一級トシ爾餘ノ選舉人ヲ二級トス(町村制第十三條)
町村長ハ選舉ヲ行フ毎ニ其選舉前六十日ヲ限リ選舉原簿ヲ製シ各選舉人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選舉人名簿ヲ製
ス可シ(町村制第十
八條第一項)

各級ニ於テ選舉ヲ行フノ順序ハ先ツ二級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ一級ノ選舉ヲ行フ可シ(町村制第十
九條第二項)

原 告 石川縣石川郡
林中村長
松尾清之進

被 告 石川縣參事會
石川縣知事
李家隆介

訴訟代理人 三清春次郎

主 文

原告ノ請求相立タス

理 由

町村制等十三條第一項ニハ選舉人ハ分テ二級ト爲ストアリ同第二項ニハ選舉人中直接町村稅ノ納
額多キ者ヲ合シテ選舉人全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル可キ者ヲ一級トシ爾餘ノ選舉人ヲ二級トス

選舉人名簿調製ノ様式

トアリ又同第十九條二項ニハ各級ニ於テ選舉ヲ行フハ順序ハ先ツ二級ノ選舉ヲ行ヒ次ニ一級ノ選舉ヲ行フヘシトアリ而シテ選舉人名簿ノ調製ニ付テハ同第十八條第一項ニ町村長ハ選舉ヲ行フ毎ニ其選舉前六十日ヲ限リ選舉原簿ヲ製シ各選舉人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選舉人名簿ヲ製スヘシトアリテ而カモ該選舉人名簿ノ正否並其等級ノ當否ニ付テハ同第三十七條中訴願及訴訟ヲ許ス旨ノ規定アルニ依リ以上各條ヲ綜合審按スレハ選舉人名簿ハ選舉人ノ等級ノ區別及其標準タル納税額ヲ明示スヘキモノト解スルヲ相當トスルカ故ニ原告カ町村制中該名簿調製ノ様式ヲ定メタル條規ナキヲ理由トシ右等級及税額ヲ脱シ調製シタル本件名簿ハ町村制ノ趣旨ニ違背シ適法ニアラス依テ主文ノ如ク判決ス

●漁業免許取消請求ノ訴 明治四十三年第九十四號 明治四十四年三月十三日第三部宣告 (請求不立)

判決要旨

一、漁業免許出願ニ當リテ利害關係アル漁業者ト豫メ協定ヲ爲スコトノ慣習ハ行政上ノ便宜ニ過キサレハ之ニ違反セル處分ヲ違法トナスモノニアラス
一、鱒大敷網漁業權者ハ其漁場ニ向ヒテ來遊スル魚族(免許セラレタル漁獲物)ヲ獨占捕獲スルノ權利アルニアラス從テ新規

漁業ノ爲メニ幾分ノ障害ヲ受クルモ之ヲ以テ直ニ其權利ヲ侵害セラレタリト云フヲ得ス
一、新規漁業ノ既存漁業ニ與フル障害カ相兩立スルコト能ハサル程度ニ至ラサレハ漁業法施行規則第八條ニ所謂相容レサルモノニ該當セス

(参照) 前條ノ外水産動植物ノ蕃殖保護其ノ他公益ニ害アリト認ムル漁業又ハ免許ヲ受ケタル漁業ト相容レスト認ムル漁業ハ之ヲ免許セス(漁業法施行規則 第八條第一項)

原 告 京都府與謝郡朝妻村 佐藤 繁藏 外四十三名
右代表者 石倉 米治 訴訟代理人 原 彌生
被 告 京都府知事 大森 鍾一 訴訟代理人 山中 實
從參加人 京都府與謝郡伊根村 永濱 濱半次 訴訟代理人 花井 卓藏 高橋 順平

原告ノ請求相立タス

理由

漁 免許ニ關スル隣接者トノ協定

原告ハ本件從參加人ニ對スル被告ノ免許ハ漁業免許ヲ爲スニ當リテハ利害關係アル漁業者トノ協
定ヲ必要トストノ從來ノ慣習ニ違反シ違法ナリト主張スルモ漁業免許ノ許否ハ當該官廳ノ職權ニ
屬シ利害關係者トノ協定ヲ要ストノ慣習ハ假令存在ストモ單ニ行政上ノ便宜ニ出テタルモノ
ニシテ官廳ヲ羈束シ之ニ違反セル處分ヲ違法トナスノ效力ヲ有スルモノニアラス原告ハ漁業法施
行規則第八條ニ所謂「免許ヲ受ケタル漁業ト相容レス」トハ必スシモ經濟上相兩立シ得サル場合ヲ
云フニアラスシテ兩者ノ權利相容レサルコトヲ云フ者ナルカ故ニ苟モ新ナル漁業ニシテ既存ノ漁
業ニ障害ヲ與ヘンカ茲ニ權利侵害アリ從テ兩者相容レサルモノト云ハサルヲ得ス然ラハ本件被告
ノ免許ハ違法ナリト主張スレトモ元來鱒大敷網漁業權者ハ免許セラレタル漁場ニ於テ免許セラレ
タル方法ニ依リ免許セラレタル漁獲物ヲ捕獲シ得ルニ止マリ其ノ漁場ニ向ヒテ來遊スル魚族(免
許セラレタリ漁獲物)ヲ獨占捕獲スルノ權利アルニアラス故ニ新ナル漁業ノ爲メニ幾分ノ障害ヲ
受クルモノヲ以テ直チニ權利ヲ侵害セラレタリト云フヲ得ス而シテ當裁判所カ相當ノ鑑定ト認め
タル「新規則票第二號定京第五七三號ノ大敷網カ新井第一號定京第四九三號大敷網ニ與フル障害
ハ舊規則票第二號定京第五六一號大敷網カ新井第一號大敷網ニ與フル障害ヨリ頗ル減少セリ」トノ
鑑定人川角也ノ鑑定及「其障害ハ漁場ニ於ケル前記ノ網ヲシテ經濟上絕對ニ存立スルコト能ハ
サラシムル程度ノモノト認ムルコト能ハス」トノ鑑定人理學博士岸上鎌吉ノ鑑定並ニ然レトモ其
障害ノ程度ハ相兩立スルコト能ハサルモノニ非ス」トノ鑑定人北原多作ノ鑑定ニ依レハ原告ノ漁
場ハ定京第五七三號大敷網ノ爲メニ幾分其ノ魚道ヲ遮斷セラレ障害ヲ蒙ルコト明カナリト雖其ハ

障害ノ程度ハ兩立スルコト能ハサルニ至ラサルモノナルヲ以テ兩者ノ關係ハ未タ以テ漁業法施行
規則第八條ニ所謂相容レサルモノト認ムルヲ得ス

●村長懲戒解職裁決取消請求ノ訴 明治三十九年第二一十號 明治四十四年三月十五日第一號宣告 (請求不立)

判決要旨

一、町村長ノ懲戒裁ヲ爲スニ付テハ町村制上之レカ審問手續ニ
付キ別段ノ規定ナクハ郡長カ署名捺印セル審問書ヲ村長
ニ交付シ之レニ對スル村長ノ答辯書他人ヲシテ答辯ヲ記載
セシテ徵シ依テ以テ裁決ヲ爲スモ違法ニアラス

島根縣仁多郡三成村

原

告 川西傳之助

訴訟代理人 岸井辰雄

島根縣參事會

被

告 丸山重俊

訴訟代理人 和久利善三郎

主文

原告ノ請求相立タス

懲戒裁判審問ノ手續

理由
原告ハ本件懲戒裁判ノ審問手續ニ關シ本件ハ明治三十八年三月二十日仁多郡書記内田榮之助三成村役場ニ出張シ審問書(一)ヨリ(八)ニ至ル事項ニ付答辯ヲ求メタルニ依リ原告ハ役場吏員若槻富太郎ヲシテ其答案ヲ記入セシメ署名ノ上前記郡書記ニ交付セシニ仁多郡參事會ハ即日懲戒裁決ヲ爲シタルモノニシテ郡長カ郡役所ニ於テ懲戒裁判ノ爲メニスキコトヲ明示シテ自ラ審問セサリシモノナレハ町村制ノ規定ニ反スル違法ノ裁決ナルヲ以テ取消サルヘキモノナリト云フモ町村制ニ於テハ懲戒裁判ハ郡長其審問ヲ爲スヘキ旨規定セラルル外其審問ノ手續ニ關シ何等別ニ規定セラルル所ナキヲ以テ原告ノ自認スルカ如ク郡長ノ署名捺印セル審問書ヲ原告ニ交付シ原告ニ於テ他人ニ答辯ヲ記入セシメシトスルモ尙ホ自ラ署名捺印シテ答辯書ヲ提出セシ以上ハ町村制ノ規定ニ違反スルモノト認メ難キノミナラス乙第十四號證郡長同答書乙第十五號證審問書ニ依リハ三月二日審問書ヲ發シタル事實竝ニ三月二日同月二十日兩回原告ヲ郡役所ニ召喚シ審問書ヲ交付シ且三月二十日ニ於テハ郡長自ラ審問セシ事實ヲ認メ得ヘキニ依リ此點ニ關スル原告ノ主張ハ理由ナキモノトス

●村税所得税割賦課不當處分並裁決取消ノ訴 明治四十三年第二百四十四號 明治四十四年七月八日第二部宣告 (請求相立)

判決要旨

一、石油會社ノ業務ハ原油ヲ採掘シテ之ヲ精製販賣スルニ在ルヲ以テ單ニ原油ヲ採掘シタルノミニテハ未タ營業ヲ爲シタリト云フ可ラス從テ其ノ所在村カ原油ノ採掘額ヲ標準トシテ所得税割ヲ賦課シタルハ違法ナリ

原告 新潟縣長岡市城内町一丁目七番地第一石油礦業 寶田石油株式會社

右代表者 山田 又七 訴訟代理人 矢部 廉

被告 新潟縣參事會 新潟縣知事伯壽 清棲 家教 訴訟代理人 寒川 卯之七

從參加人 新潟縣中蒲原郡 同村長 金 津 村

右代表者 和氣 省吾 訴訟代理人 長島 鷲太郎 中町 俊助

主文

石油會社ノ營業ニ對スル所得税割ノ賦課

被告カ原告ニ對シ與ヘタル明治四十三年八月十五日裁第十一號ノ裁決及新潟縣中蒲原郡金津村長カ原告ニ對シ爲シタル明治四十年村稅所得稅割金八百七十六圓九十三錢ノ賦課ハ之ヲ取消ス

事實及理由

原告請求ノ要旨ハ原告會社ハ新潟縣長岡市ニ營業所ヲ有シ市外ナル金津村及ヒ其他ニ設ケタル石油鑛井ヨリ鐵管ニ依リ原油ヲ金津村外ナル製油所ニ輸送シ同所ニ於テ之ヲ精製シ其製品ヲ長岡市ニ於テ販賣スルヲ以テ營業ト爲スモノナリ而シテ係争ノ村稅ヲ賦課シタル金津村ニ於テハ單ニ原油採取ニ要スル機械的設備ヲ爲シ居ルニ止リ毫モ營業所ヲ有セス又同村ニ於テハ何等營業ヲ爲サルヲ以テ營業ヨリ生スル所得ナルモノ全ク無之ニ拘ハラヌ金津村長カ明治四十年村稅所得稅割金八百七十六圓九十三錢ヲ原告會社ノ當村ニ於ケル營業ノ所得ニ對スル附加稅ナリトシテ之ヲ賦課シタルハ不法ナルニ依リ遂次金津村長中蒲原郡參事會及被告新潟縣參事會ニ訴願シタルモ總テ排斥セラレタルヲ以テ本訴ヲ提起シタルモノナリ依テ右賦課及被告ノ裁決ヲ取消サレタシト云フニアリ被告答辯ノ要旨ハ課稅法上營業ト稱スルハ營利ノ目的ノ爲ニ一般交換經濟ニ參與シ獨立シテ永續的ニ營マルル經濟業務ヲ廣ク指スカ故ニ利益ヲ目的トセル採油行爲自體モ營業ナリ而シテ原告會社ハ金津村ニ於テ原油ノ採取ヲ爲シ居ルコトハ争ナキ事實ナルノミナラス同村ニ於テ原油ヲ其儘販賣シタル事實モ存スルニ依リ金津村カ原油採取ノ高ニ應シ所得稅割ヲ賦課シタルハ不當ニアラス依テ原告ノ請求ヲ排斥セラレタシト云フニアリ

切ノ業務ヲ稱スルモノナレハ石油採取事業ノ如キ假令精製販賣等ノ附屬事業ト結合セラレテ行ハルル場合ト否トニ拘ハラヌ當然町村制第九十三條ニ所謂營業ノ中ニ包含スルコト疑ヲ容レヌ而シテ其點ハ地方稅賦課ノ趣旨ヨリ論スルモ又府縣制鑛業法等ノ精神ヨリ觀察スルモ明ナリ假ニ百歩ヲ讓リ原油採取事業ハ之カ精製販賣事業ト結合スルニ非サレハ營業ヲ爲スニ足ラストスルモ原告ハ其主張ノ如ク金津村其他ニ設ケタル鑛井ヨリ原油ヲ採取シ之ヲ同村外ナル製油所ニテ精製シ其製品ヲ長岡市ニ於テ販賣スルコトヲ營業ト爲スモノニシテ即チ原告ハ金津村其他ノ村ト長岡市ニ亘リテ營業ヲ爲スモノト云フヲ得ヘク從テ原告カ金津村ニ於テ其營業中ノ主要部分タル原油採取行爲ヲ爲ス以上原告ハ同村ニ於テ營業ヲ爲スモノト云ハサルヘカラス加之原告ハ金津村内ノ新井津出張所附屬鹽谷鑛場ニ於テ原油ノ販賣ヲモ爲スニ依リ被告カ從參加人ハ原告ニ對シ町村制第九十三條ニ依リ町村稅徵收權アリト裁決シタルハ不法ニアラス依テ原告ノ請求相立タスト判決セラレタシト云フニアリ

家祿未濟額給與願ニ對スル不當處分不服ノ訴

明治四十二年第五百八十二號
明治四十四年九月十八日第一號宣告

祿制改革ニ關スル藩知事ノ權能○明治二十二年十二月太政官布告ノ適用

判決要旨

一、明治三年九月藩制施行以後ニ於テモ藩知事ハ祿制ヲ改定變革シ得ルノ權能ヲ有シタルモノトス
一、明治二年十二月二日太政官布告ハ舊幕臣ヨリ朝臣ト爲リタル者ノ祿制ヲ定メタルモノニシテ各藩ニ於ケル士族卒ニ適用セラルヘキモノニアラス

青森縣南津輕郡黒石町大字内町

原告 唐牛敏世 外二名

訴訟代理人 柳喜洋芽

被告 大藏大臣

山本達雄

訴訟代理人 小島誠

主文

原告ノ請求相立タス

事實

原告請求ノ要旨ハ原告等ハ舊黒石藩貫屬ニシテ同藩ニ於テ家祿給與ヲ受ケ來リシモノナル所藩制施行ノ際同藩廳ハ應費或ハ藩債償還ノ補償ニ充テラルルカ爲メ明治三年十二月中一般士族ノ祿高

ヲ減シ十一石四斗以下ト爲スノ令達ヲ發セラレタリ抑右藩廳ノ令達ハ明治二年十二月二日太政官布告祿制第一項ノ但書中「士族ノ元高十三石ニ滿タス卒ノ元高八石ニ滿タルモノハ是迄通りノ事」トノ規定ニ反シ過嚴ナル減祿ト思考セルモ如何セン當時ノ勢藩主藩士ノ關係上敢テ之ニ抗抵スル能ハス其儘ニ致シ來レルモ當時藩廳ニ於テ前段祿制ニ背戾シタル處置ヲ爲シタルハ必竟錯誤ニ出テタルモノニ外ナラサルニ由リ家祿賞典祿處分法ニ基キ被告大藏大臣ハ願出テタル所被告カ之ヲ排斥シタルハ不當ノ處分ニシテ服從スル能ハス故ニ本訴ヲ提起シタリト謂フニ在リ
被告答辯ノ要旨ハ原告ノ援用スル明治二年十二月二日ノ布告祿制ハ同布告ニ明示セル如ク所謂中下太夫士以下ノ爲ニ制定セラレタルモノニシテ各藩士族卒ニ適用スヘキモノニ非サルヲ以テ其請求ハ理由ナキモノトス依テ原告ノ請求ハ棄却セラレタリト謂フニ在リ
右被告ノ答辯ニ對シ原告ハ假リニ明治二年十二月二日布告ノ祿制ハ各藩主士族卒ニ適用スヘキモノニ非ストスルモ明治三年十二月即原告等カ減祿處分ヲ受ケタル當時ハ既ニ藩制實施セラレタル後ナルヲ以テ藩知事ハ既定ノ祿制即明治二年十二月二日ノ布告ニ基キ減祿ヲ爲スハ格別祿制ヲモ適用セス權限ナキニモ拘ラス藩知事ハ減祿ヲ爲スノ權能ヲ有スルモノノ如ク心得私擅ニ減祿ヲ爲シタリトセハ更ニ錯誤ノ甚シキモノナリ故ニ何レニセヨ明治三年十二月ニ於テ舊黒石藩カ爲シタル減祿處分ハ錯誤ニ外ナラスト主張シ被告ハ之ニ對シ藩制施行以後ト雖藩知事ハ改祿又ハ減祿ヲ爲スノ權限ヲ有スルヲ以テ其權限ニ基ク減祿ハ之ヲ錯誤ト謂フヲ得サル旨ヲ陳辯セリ

理由

祿制改革ニ關スル藩知事ノ權能○明治二年十二月太政官布告ノ適用

按スルニ本訴ハ明治二年十二月二日ノ布告祿制ハ各藩主族卒ニモ適用セラルヘキモノナリヤ否ヤ及明治三年九月十日藩制施行以後ニ於テ藩知事ハ其祿制ヲ改革スルノ權能ヲ有シタリヤ否ヤノ二

爭點ヲ決スレハ其請求ノ當否自ラ之ヲ判定シ得ヘシ
一、明治二年六月各藩封土版籍ヲ奉還セシヲ以テ同六月二十五日政府ハ各藩主ヘ令達シ藩主及其家臣ノ祿制ニ關シ準則ヲ定メラレタルト共ニ同十二月舊幕臣ヨリ朝臣トナリタル當事ノ所謂中下太夫士等ノ祿制ヲ定メラレタルモノナルコトハ右布告ノ前文ニ依ルモ之ヲ察知シ得ヘシ即チ「先般各藩大義名分ノ紊壞ヲ正シ海外諸國ノ形勢ヲ察シ以テ其封土ヲ奉還ス依テ大ニ公論衆議ヲ被爲盡府藩縣一途ノ改令ニ歸シ天下ト共ニ綱紀ヲ更張被遊度御主意ニ付更ラニ藩知事ニ被任隨テ家祿之制被爲定藩ニ於テモ維新之御政體ニ基キ追追改正可就テハ中下太夫士以下ノ稱被廢都テ士族及卒ト稱シ祿制被相定候爾後各地方官ニ於テ可爲貫屬旨被仰出候條篤ト御主意ヲ奉體シ云云」ト而シテ當時ノ布告布達等往住其ノ前文ヲ以テ之ヲ制定ノ理由及適用ノ範圍ヲ言明シ理由ノ效ヲ收メムトスルニ徵スレハ該布告ハ六月ノ藩知事ヘハ達ニ相伴フテ舊幕臣ヨリ朝臣ト爲リタル者ニ關シ祿制ヲ定メタルモノニシテ各藩ニ於ケル士族卒ニ適用セラルヘキモノニ非サルコトハ明ナリ從テ該布告ニ準據セサル舊黑石藩ノ祿制ハ錯誤ナリトスル原告ノ主張ハ其ノ理由ナキモノトス
二、藩制施行以後ニ於テ藩知事カ祿制ヲ改定スルノ權能ヲ有セシヤ否ヤヲ查覈スルニ前示明治二年六月二十五日藩知事ヘノ達ニ依リ藩主ハ家祿ノ振合ニ基キ適宜家臣ノ給祿ヲ改革スヘキ旨定メラレ而シテ藩制條項中毫モ之レト相抵觸スル所ナキヲ以テ右改祿ノ事ハ藩知事ノ權能トシテ保有

セラレタルモノト解スヘキナリ加之藩制第四項ニ各藩財政ノ標準ヲ示シ公廩費士族祿ニ充ツヘキ分ハ精節減シ有餘ヲ以テ軍用ニ蓄置クヘシト規定シタルヲ見ルモ適宜改祿ノ權限ヲ認メタルモノト謂ハサル可カラス且實際上ニ於テモ政府カ藩知事ノ改祿ノ權能ヲ公認シタルコトハ明治四年七月二十日民部省達ニ「士族卒從前ノ祿高昨今截減ノ祿高云云」トアリ又同年十二月四日大藏省達ニ「士族卒祿高ノ儀舊藩適宜ヲ以テ宛行置候高ヲ押ヘ云云」トアルニ依リ之ヲ證シ得ヘシ是ヲ以テ藩制施行以後ニ於テモ藩知事ハ適宜祿制ヲ改定變革シ得ルノ權能ヲ有シタルコト明カニシテ從テ此點ニ基ク原告ノ主張モ亦其理由ナキモノト謂ハサルヘカラス
以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

●地方稅水產稅賦課取消請求ノ訴 (請求不立)

判決要旨

一、地方長官ニ提出スヘキ異議ノ申立ヲ提出ノ手續ヲ誤マリ村役場ニ提出シタルカ爲メ右異議申立書カ地方長官ニ進達セサル以前法定ノ期間ヲ經過シタルトキハ村役場ニ提出シタルトキカ未タ法定期間内ナリシ一事ヲ以テ法定期間内ニ異議ノ申立ヲナシタルモノト云フヲ得ス

課稅ニ對スル異議ノ申立

一、北海道地方費法第四條ニ後記ノ如キ法文アリトスルモ其ノ地方稅賦課規則ニ於テ課稅ノ項目ハ毎年新々ニ之ヲ選定スヘキ定メアリテ水產稅カ此ノ選定ニ入ラサリシトキハ其ノ之レニ入ラサリシ年度ニ於テ水產稅ヲ徵收スルコトヲ得ヌ

(參照) 勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設ケルモノノ外北海道地方稅ノ賦課徵收ニ關スル事項ニ付テハ府縣稅ニ關スル規定ヲ準用ス但シ其ノ規定中府縣參事會ノ職務ハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村又ハ市町村會トアルハ區町村又ハ區町會及之ニ準スヘキモノニ該當ス(北海道地方費法第七條)

府縣稅ノ賦課ヲ受ケタル者其賦課ニ付違法若ハ錯誤アリト認ムルトキハ徵稅令書又ハ徵稅傳令書ノ交付後三箇月以内ニ府縣知事ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得(府縣制第一百)

(參照) 水產稅ハ水產物ノ採取又ハ製造ヲ營業ト爲ス者及水產物ノ採取ニ關スル漁業權ヲ享有スル者ニ之ヲ賦課ス(北海道地方費法第四條)

原告 北海道廳長官
被告 石原 直次郎
大字 小牧 二番地 土族 宿業

主 文

被告カ明治四十四年三月一日附内地第一四四九號ヲ以テ爲シタル決定ノ一部及明治四十二年度第

四期地方稅金七十二錢ノ賦課ハ之ヲ取消ス
其他原告ノ訴ハ之ヲ棄却ス

理 由

(一)北海道地方費法第七條府縣制第一百五條ニ依レハ府縣稅即チ地方稅ノ賦課ニ對スル異議ハ徵稅令書又ハ徵稅傳令書ノ交付後三箇月以内ニ北海道廳長官ニ申立テサルヘカラサルカ故ニ本件第一期分ニ對シテハ明治四十二年十月十二日第二期分ニ對シテハ明治四十三年一月二日第三期分ニ對シテハ同年四月十八日迄ニ申立ヲ爲ササルヘカラサルニ甲第二號證異議申立書ハ明治四十三年四月二十一日附ニシテ被告ニ到達シタルハ同月二十三日ナルヲ以テ第一期乃至第三期分ニ就テハ孰レモ法定ノ期間ヲ經過シタルモノナレハ被告カ之ヲ却下シタルハ相當ニシテ即チ適法ニ異議ノ申立ナキモノナレハ此點ニ關スル訴ハ適法ト云フヲ得ヌ而シテ原告カ明治四十二年度水產稅第一期分ノ賦課ヲ受ケタル當時同年度水產稅全體ニ涉リ異議ヲ申立テタリト云フ甲第一號證水產稅過當賦課ニ付再調願ト題スル文書ハ乙第十號證ニ依レハ苦小牧村役場ヲ經由シ室蘭支廳ニ到達シ同廳ニ於テ之レヲ北海道廳ニ送付セサル事實アルヲ以テ被告カ該文書ヲ受理シタルコトナシト云フハ當然ノコトナリ原告ハ村民カ差出スヘキ總テノ願書ハ北海道廳長官宛ノモノト雖モ地元村役場ヲ經由スヘキハ至當ノ手續ニシテ既ニ役場ヲ經テ支廳ニ到達シタル上ハ被告ノ手元ニ達セザリシトノ理由ヲ以テ無効トスヘカラスト論スルモ特ニ規定ナキ上ハ前示ノ如ク異議申立書ハ直接被告ニ提出スヘキモノナルニ原告ニ於テ之カ手續ヲ誤リ村役場ニ差出シタル爲メ該文書カ法定ノ期間

課稅ニ對スル異議ノ申立

内ニ被告ニ達セザリシモノハ、單ニ村役場ニ差出シタリトノ事實ヲ以テ、法定期間内被告ニ異議ヲ申立テタリト云フヲ得、依テ原告ノ所論ハ採用セス

(二)被告ハ水産税ノ賦課ハ收穫ノ有無ヲ問フ要ナシト云フモ、明治三十五年北海道廳令第十四號北海道地方税賦課規則第一條ニ依リ、地方税ハ此ノ規則ニ依リ、毎年別ニ定ムル所ノ課目ニ該當スルモノニ賦課スルコトアルカ故ニ、假令北海道地方費法第四條ニ掲クル者ト雖モ、毎年定ムヘキ課目ニ於テ課税スヘキコトヲ定メサル以上ハ之ニ對シテ水産税ヲ賦課スルコトヲ得サルヲ論テ、竣タス然ルニ北海道廳令第十一號明治四十二年度北海道地方税課目課額中水産税ノ部ヲ閱スルニ課目ノ欄ニ「收穫割」ト記シ課額ノ欄ニ「豫算ヲ以テ定メル水産税總額ヲ明治四十一年各水産税區水産物產出價格ニ依リ割當テ各税區ノ負擔税額トス」ト記セルニ止マリ別ニ原告ノ如キ漁業權ヲ享有スルノミニテ收穫セサル者ニ對シテ課税スルノ趣旨ヲ認メ得ヘキ記載ナキカ故ニ右年度ノ北海道地方税課目課額ハ此種ノ者ニ對スル水産税ノ賦課ヲ認メサルモノト解スルノ外ナシ被告ハ該課目課額ハ單ニ水産税ヲ各税區ニ分配スルノ規定タルニ止マリ敢テ納税義務ノ有無ニ關スル規定ニ非サル旨辯解スレトモ既ニ前顯明治三十五年道廳令第十四號第一條ノ規定ニ存スル以上該課目課額ハ單ニ各税區ニ對スル分配ヲ規定シタルニ止マラスシテ納税義務ノ有無ヲモ規定シタルモノト解スルヲ相當トスルカ故ニ被告ノ辯解ハ採用シ難シ然レハ則チ本件第四期水産税ノ賦課ハ違法ト云ハサルヲ得、依テ主文ノ如ク判決ス

●所得金額決定取消ノ訴

明治四十四年第三十三號
明治四十四年五月十七日第三部宣告

(請求相立)

判決要旨

一、政府ニ於テ一旦決定シタル所得金額ハ其ノ第一種タルト第一種タルトナ不問所得税法第三十七條第三十九條第四十一條ノ結果ニ依ルノ外之ヲ變更スルコトヲ許サス
一、稅務官吏カ所得金額ヲ決定スルニ付キ誤算アリシトスルモ已ニ之ヲ決定シタル以上ハ前記法文ニ據ルニアラサレハ其ノ決定ヲ變更スルコトヲ得ス

(參照) 所得税ハ所得税法第九條第三十條第三十一條ニ依リ決定金額ニ依リ之ヲ徵收スル前項ノ決定金額ハ所得税法第三十七條第三十九條第四十一條ノ結果ニ依ルノ外之ヲ變更セス(所得税法施行規則第三十二條)

(參照) 第一種ノ所得金額ハ損益計算書ヲ調査シ政府之ヲ決定シ第三種ノ所得金額ハ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府之ヲ決定ス(所得税法第九條第一項)

八月三十日マテニ調査委員會成立セサルトキハ政府其ノ所得金額ヲ決定スル調査委員會閉會ノ日ヨリ第二十五條ノ期間以内ニ又ハ八月三十日マテニ調査終了セサルトキハ所得金額調査未済ノモノニ限リ政府其ノ所得金額ヲ決定ス

(所得税法第三十條)

一旦決定シタル所得金額ノ變更

政府ハ調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ之ヲ再調査ニ付ス仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再調査ニ付シタル日ヨリ七日以内ニ調査結了セサルトキハ政府ニ於テ所得金額ヲ決定ス(所得税法第三十一條)

東京市麴町區有樂町一丁目
一番地

原告 日本郵船株式會社

取締役社長

右法定代理人 近藤 廉平

訴訟代理人 岩田 宙雄

東京稅務監督局長
菅野 盛次郎

主 文

被告カ明治四十四年一月二十三日附ヲ以テ原告ノ明治三十九年十月ヨリ同四十年三月ニ至ル事業年度分所得金額ヲ金百六十九萬二千五百三十九圓七十二錢ト爲シタル決定竝原告ノ明治四十年四月ヨリ同年九月ニ至ル事業年度分所得金額ヲ金百四十四萬九千三百四十六圓十九錢ト爲シタル決定ハ何レモ之ヲ取消ス

理 由

所得稅法施行規則第三十二條第二項ニ「前項ノ決定金額ハ所得稅法第三十七條第三十九條第四十條ノ結果ニ依ルノ外之ヲ變更セス」トアルニ由リ之ヲ觀レハ一旦決定シタル所得金額ハ前示三箇ノ場合ノ外之ヲ變更スルヲ許ササル法意ナリト解セサルヘカラス而シテ本件ノ場合ハ右三箇ノ場合ノ何レニモ該當セサルヲ以テ所得金額決定ヲ變更スル本件決定ハ違法ナリト謂ハサルヲ得ス

被告ハ所得稅法施行規則第三十二條第二項ノ規定ハ第三種ノ所得ニ關シテハ適用スヘキ條項ニシテ本件ノ如キ第一種ノ所得ニ對シ適用スヘキモノニアラスト謂フト雖モ右第三十二條第一項ニハ「所得稅ハ所得稅法第九條第三十條第三十一條ニ依ル決定金額ニ依リ之ヲ徵收ス」其ノ第二項ニハ「前項ノ決定金額」トアリテ所得稅法第九條第一項ハ第一種及第三種所得金額ノ決定ニ關スルモノナルカ故ニ右第三十二條第二項ノ規定ハ第一種所得金額ノ決定ニ關シ適用ナキモノト解スルヲ得サルニ依リ被告ハ主張ハ其ノ理由ナシ
以上ノ理由ニ依リ主文ノ如ク判決ス

行政裁判例彙報第二十二卷行政裁判所判例 畢

一旦決定シタル所得金額ノ變更

司法判例彙報第二十二卷第十二號 第二百五十九號

明治四十四年十二月十日發行
每月一回十日發行

定價

- 一本誌定價ハ一冊金拾五錢郵稅壹錢半ケ
年前金九拾錢共郵稅壹ケ年前金壹圓七拾
四錢共郵稅但シ郵券代用ハ一割増
- 一本誌ハ前金ニアラサレハ一切送附セス
- 一本誌廣告料ハ一等(表)一頁十五圓二
等(裏)一頁十二圓三等(普通)一頁拾圓
- 一本誌代金ヲ郵便爲替ニテ送金セラル、
トキハ總テ東京市九段郵便電信支局受
取ニテ送附アルヘシ
- 代金拂込ノ際代金ノ領收證ヲ求メラル
、諸氏ハ送金ノ際端書一葉若クハ郵便
切手一錢五厘ヲ送附セラルヘシ
- 一本誌讀者ニシテ宿所ヲ轉セラレタルト
キハ直チニ新舊ノ兩宿所ヲ通知セラル
ヘシ
- 一本誌前金盡キタルトキハ發送ノ際封皮
ノ氏名ヲ朱書可致ニヨリ次號發兌
- 迄ニ代金拂込アルヘシ
- 一本誌代價拂込ハ東京市麴町區飯田町五
丁目卅八番地 判例彙報社
- 宛差出アルヘシ

判例彙報大賣捌所

東京市神田區一ツ橋通
有斐閣
東京市京橋區銀座四丁目
東海堂 川合 晉
東京市神田區表神保町
東京 堂

明治四十四年十二月十日印刷
明治四十四年十二月十五日發行

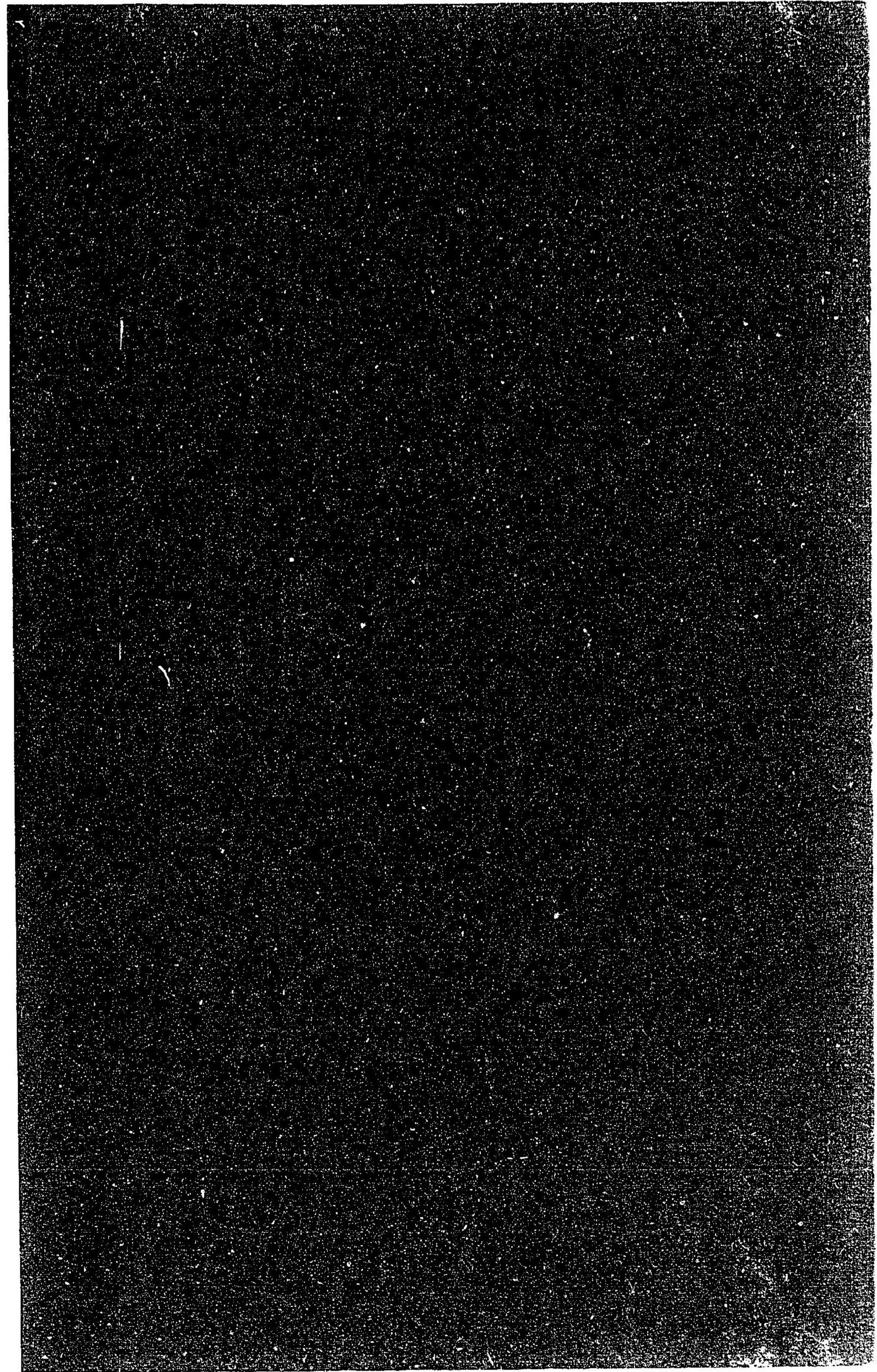
編輯人 東京市神田區淡路町二丁目七番地 江木 衷
發行人 東京市麴町區飯田町五丁目三十八番地 工藤 角三郎
印刷人 東京市神田區表神保町二番地 三島 宇一郎
印刷所 東京市神田區表神保町二番地 弘文 堂
發行所 東京市麴町區飯田町五丁目三十八番地 判例彙報社
振替口座東京六五三四番

明治三十二年三月一日內務省認可

明治三十二年八月十四日第三種郵便物認可

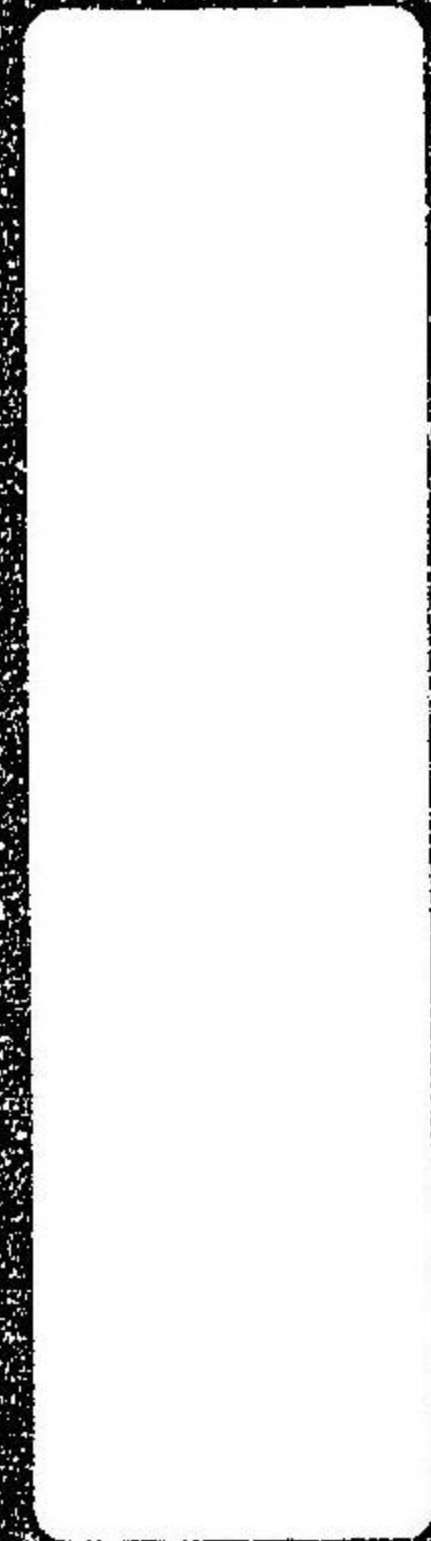
雜21

107



雜2

107



34.11.13